
おてんば姫の冒険～ハルケギニア編～

ふじさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おてんば姫の冒険〜ハルケギニア編〜

【Nコード】

N0807I

【作者名】

ふじさん

【あらすじ】

ドラゴンクエスト4のアリーナ（エンディング後）がルイズに召喚されます。

※2010.04.05追記※

挿し絵を追加してみました。

とりあえず第1話だけです。

あまり上手でもないイラストなので、自分のイメージを大切にした

い方は挿絵表示機能をOffにしたほうが良いかもです。

第1話（前書き）

はじめまして、ふじさんという者です。

私はこれまで小説を書いたことがありません。

ぶっちゃけ初めてです。

よって、内容や表現などがたいへん稚拙なものになるかもしれません。

さらに、この作品はアリーナが最強になる可能性が高いです。
それでもよろしいという方はどうぞ。

第1話

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！宇宙の何処かにいる強く美しく高貴な使い魔よ！わが導きに応じ、姿を現しなさい！！」

桃色の髪の少女が叫んだ途端、116回目の大きな爆発が起こる。彼女の級友たちは待ちくたびれて、みんなとっくの昔に教室に戻ってしまったため、今ここにはルイズと担当教諭のコルベールの2人しかない。

（また失敗か・・・今日のところはそろそろやめさせておいたほうが良いか・・・）

コルベールがそう考えていたのとは裏腹に、ルイズは召喚が成功したことを確信していた。

（今までの爆発の時とは違うこの感覚・・・やったわ！きっと召喚に成功したのよ！）

そうしてしばらくして煙が晴れると、そこにはひとりの少女が倒れていた。

> i 5 8 6 5 — 9 6 0 <

トリステイン魔法学院の教師、コルベールは困っていた。

春の使い魔召喚の儀式。

2年生への進級試験でもあるこの儀式は、毎年ほぼすべての生徒が難なくクリアする。

だが、今年は例外がいた。

名門ヴァリエール家の三女でありながら魔法が一切使えない少女、

ルイズである。

彼女は座学の成績はトップクラスなのだが、どんなに努力をしてもコモンマジックすら使えない。

コルベールも彼女が魔法が使えるようになるために、他人の何倍も努力をしていたのを知っていたし、だからこそ、ルイズが使い魔召喚の儀式で何十回も失敗した後、ようやく召喚を成功させたことは非常に喜ばしいと思う。

だが、召喚された生き物が問題だった。

歳の頃はルイズと同じくらいで、亜麻色の髪に中央がとがった変わった形の青い帽子をかぶった少女だ。

そう、驚くべきことに召喚されたのは人間の少女だった。

だが、問題はそこではない。

問題はその少女が帽子と同じ色のマントを身につけていたことである。

ハルケギニアにおいてマントは貴族の証、つまりルイズは貴族を召喚してしまったことになる。

貴族を使い魔にするなどということは到底許されることでは無いし、もしそのようなことをしてしまえば大問題になる。

（とりあえず召喚された少女から話を聞いて、それから考えることにしよう）

そこまで考えたところで、さっきまで隣にいたルイズが、いつの間にか少女のそばにいることに気づいた。

（っ！まさか！？）

「待ちなさい！ミス・ヴァリエール！」

慌ててルイズのもとに向かうコルベールであったが、

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！五つの力を司るペンタゴン！この者に祝福を与え、私の使い魔となせ！！」

ルイズは早口でそう唱えると、少女にキスをした。

ルイズのもとにたどり着いたコルベールは少女とルイズを引きは

がしたが、すぐに少女が呻き出し、彼女の左手にルーンが浮かび上がった。

（遅かったか・・・）

「何てことをしてくれたんだ！ミス・ヴァリエール！」

第2話

少女が目を覚ますと、そこは先程まで居た城の中では無かった。

(え、ここどこよ?)

「失礼致します、ミス」

少し混乱していると、近くにいた頭の薄い男が話し掛けてきた。

「私は、ここトリステイン魔法学院で教師をしておりますコルベールと申します。突然で驚かれていますかと思いますが、あなたは使い魔召喚の儀式で召喚されましたのです。失礼ですが、お名前を伺ってもよろしいでしょうか?」

(トリステイン?…そんな地名聞いたことないわ。それに魔法学院って…?)

「あの、ミス?」

「あ、あたしはアリーナ。アリーナ・サントハイムよ」

「では、ミス・サントハイム。あなたは、どちらの国の貴族なのでしょう?」

「へ?あたしはサントハイム王国の王女よ」

しばらく沈黙が続く。

「「ええええええええっ!!!!!!」」

コルベールとルイズの叫び声が見事にハモった。

「おおお、王族を召喚しちゃったの、わたし!」?

「あ、あの、ミス・サントハイム。と、とりあえず学院長室でお話を伺いますので、ご案内致します」

「え、ええ、わかったわ」

アリーナは、何でこの2人がこんなに驚いているのか、というかそもそも使い魔召喚の儀式とは何なのか、とにかくわからないことだらけだったので、とりあえずこのコルベールとかいう頭の寂しいオッサンに言われた通りにすることにした。

「ふむう……なるほどのう……」

ここは学院長室。

学院長であるオールドオスマン、ルイズ、コルベール、そしてアリーナの4人が話しあっていた。

お互いにいろいろと情報交換をした結果、アリーナはどうやら違う世界から召喚されたらしいという結論に至った。

「でも、異世界なんてものが本当にあったなんて……」

ルイズをはじめ、コルベールもオスマンもはじめのうちはロバ・アル・カリイエから召喚されたのではないかと考えたが、アリーナが、自分は世界中を旅したことがあるがトリステインもハルケギニアも聞いたことが無いということと、自分の国、いや、世界では月はひとつしか無かったことを話すと、もはや異世界から召喚されたというぐらいしか思えなかったのである。

これがもし、王族のアリーナではなく、平民の少年が言ったことであれば、オスマンやコルベールはともかくルイズは絶対に信じなかっただろう。

「ところで、そろそろ城に帰してほしいのだけど」

アリーナがそう言うと、急に部屋の空気が重くなった。

「そ、その……ミス・サントハイム。申し上げにくいのですが……あなたは帰ることが出来ないのです」

「何で！？呼び出す魔法があるから送り返す魔法もあるんでしょ！？」

「いえ……その……使い魔召喚は神聖な儀式で、一度呼び出した使い魔は変更することはできないとされています。なので、召喚の魔法はあっても、送り返す魔法は無いのです」

「そんな……」

（旅も終わって、城のみんなも戻ってきて、ようやく前みたいな生活ができるようになったのに……）

明らかに落ち込んでいるアリーナを見て、コルベールは慌てて話を続けた。

「も、もちろん我々もあなたがあなたの国に帰る方法を探します！ですが、帰る方法が見つかるまではここで生活して頂くということに…」

（あれ？でも、これってチャンスじゃない？別の世界ってことは、あたしのまだ知らない強い奴がたくさんいるってことじゃない！帰る方法も探してくれるって言ってたし、落ち込んでいても何にもならないわ！今はこの世界を楽しまなきゃ損よ！何だかワクワクしてきたわー！！）

「あの…ミス・サントハイム、どうかされましたか？」

コルベールは先程まで落ち込んでいた少女がいきなり元気になったので、一体どうしたのかと思ったようだ。

「いえ、何でもないわ。それよりもわかったわ、あなたの言うとおり帰る方法がわかるまでここで生活することにするわね。というか、他に選択肢も無いしね」

「そ、そうですか。色々にご不便を感じるでしょうが、よろしくお願いします」

ここまでは何とか穏便に話が進んで安堵するコルベール、オスマン、ルイズの3人であった。

「それで、あなたは使い魔召喚の儀式で召喚されたということはお話しましたよね？」

「ええ、そうね」

「それで…その…非常に申し上げにくいのですが…あなたが意識を失っている間に、そこにいるミス・ヴァリエールが使い魔の契約をしてしまったのです」

ここで、ルイズが深くうつむく。

（だって、あの時は使い魔との契約のことしか頭に無くて、無我夢中だったんだもん…）「え？そうなの？でも使い魔って何をするのかしら？」

「まず、使い魔には主人との感覚の共有が起こります。具体的には使い魔が見たものは主人も見ることできるし、主人が見たものを使い魔が見ることもできます」

「でも、あたし何も見えないわ」

「ミス・ヴァリエール、君はどうだね？」

「：わたしも何も見えません」

ルイズは俯いたまま答えた。

「ふむ：使い魔が人間だと感覚の共有は起こらないのだろうか：とにかく、共有が起こらなくて良かった。幻獣や動物ならともかく、人間で感覚の共有が起こるとプライバシーも何も無くなってしまいますからな」

「それもそうね」

アリーナが同意する。

「それから、使い魔は秘薬などを見つけてきます。例えば、硫黄や特殊なコケなどです」

「それはあたしには無理ね」

「いえ、もちろんミス・サントハイムにそのようなことをして頂くとは思っておりません。：最後に、使い魔は主人を守る存在なのです」

「それなら、あたしにもできるわ」

「ええっ！？ 本当ですか？」

即答したアリーナに他の3人は驚く。

「こう見えてもあたしはすごい強いなのよ？ 護衛ならあたしに任せ
て！」

そう言うときアリーナはルイズの前に立って、右手を差し出した。

「これからよろしくね、ご主人さま。あ、まあ、あたしがサントハイムに帰るまでの間だけだけど」

「お、怒らないんですか？」

ルイズがアリーナに問う。

「え？ だって、感覚の共有とかも起こってないし、使い魔といって

も、あなたの護衛をするだけでしょ？別に怒らないわ」

ルイズは驚いた。

王族でありながら、勝手に自分なんかの使い魔にされてしまったのに怒らないアリーナに。もし、召喚されたのがハルケギニアの王族、あるいは貴族であれば、使い魔にされるなどという不名誉、いや、侮辱といえることをされれば烈火の如く怒っただろう。

だが、アリーナは使い魔などという習慣のない別の世界の人間なのだ。

だからこそ、たいしたデメリットもなかったし、素直に使い魔にされたことを受け入れることが出来たのだ。

「良かったのう、ミス・ヴァリエール」

今までずっと黙っていたオスマンがルイズに声をかけた。

「はいっ！」

ルイズはうれしそうに返事をした。

そして、アリーナの手を取ると

「こちらこそ、これからよろしくお願いします。アリーナ姫」

そう笑いながら言った。

その後、いくつか今後の生活について話し合い、ルイズとアリーナは学院長室を退室した。「それでは殿下、お部屋にご案内させていただきます」

ルイズは、自分の使い魔になったといっても、王族のアリーナをぞんざいに扱うつもりはさらさら無かった。

だから、部屋もアリーナだけの個室を用意してもらおうかと思ったのだが、『主人と使い魔は常に一緒に居なければならない』とオスマンとコルベールが意外とこねたので、結局アリーナはルイズの部屋に住むことになった。

（あの頭の堅いエロジジイとコッパゲめ…アリーナは王族なのよ！

？それなのに個室を用意しないとか失礼じゃないの！

そこまで考えたところでアリーナが口を開いた。

「殿下じゃなくてアリーナでいいわよ。あと、敬語も使わなくていいわ」

「えっ…しかし…」

「いいから。あたしは堅苦しいのが嫌いなもの！」

「…わかりまし、わかったわ、アリーナ」

ルイズは困惑していたが、アリーナは満足げにうなずいていた。

第3話

「…うん」

(…あら？ここどこだったかしら…)

アリーナが 目を覚ますと、そこはあまり見覚えのない部屋だった。

(ああ、そういえばあたし別の世界に召喚されちゃったのよね…)
隣では召喚した張本人のルイズが寝息をたてている。

昨日の晩、寝るときに、アリーナがルイズの部屋に住むことが急に決まったため、新しいベッドの用意が間に合わなかったので、ルイズは床で寝ると言ったのだが、『そんなに気を使わなくていい』と、アリーナはルイズを無理矢理ベッドに寝かせたのだった。

アリーナが窓から外を見てみるとまだ薄暗い。

旅をしていた時の習慣で、今でも早朝に目が覚めてしまうのだ。

「まだ時間もあるみたいだし、少し外を走ってこようかしら」

アリーナはルイズから借りていた胸の部分のサイズがあってないネグリジェを着替えて、部屋から出て行った。

「ふう、いい汗かいたわ」

アリーナは学院の周りを何十周かした後、生徒たちが起きだしてそろそろ騒がしくなってくる時間に部屋に戻った。

もちろんルイズはまだ寝ている。

「さて、今日からあたしはこれを着るのね」

アリーナが手に取ったのは昨日オスマンから渡された学院の制服だった。

昨日の話し合いでアリーナは使い魔ではあるが、ヴァリエール家の客人の待遇を受けることになった。

だが、『学院ではその格好は目立つので…』と言われ、学院の制服を渡されたのだった。

これは、アリーナが生徒達から好奇の目で見られ、気分を害すことがなるべくないようにというオスマンとコルベールの配慮からだった。

アリーナは学院の制服に着替えると、未だ夢の世界へ旅立っているルイズを起こすことにした。

「ご主人さま、朝よ！起きて！」

「…むにゃむにゃ…もう食べられないわよ…」

どうやら何ともベタな夢を見ているようだ。

「起きなさい！遅刻するわよ！」

体を揺するとようやくルイズは目を覚ました。

「…はっ！？わたしの山のようなクックベリーパイは何処！？」

「何を言っているのよ」

ルイズの夢の内容に笑いながら、アリーナが声をかけると

「って、あんた誰よ！？」

と怒鳴ってきた。

「昨日あなたが召喚した使い魔よ、ご主人さま」

「…あ、ああ、そういえばそうだったわね…って、ご主人さま！？ルイズでいいわよ」

「あら、そう？じゃあルイズ、早く仕度をしないと遅刻するんじゃないかしら？」

「わかってるわ」

ルイズは寝起きでふらふらしながら、クローゼットを開けて自分で服を着替えはじめた。

仕度を終えたルイズとアリーナが部屋を出ると、隣の部屋のドアが開いて、中から燃えるような赤い色の髪の女性が現れた。

背が高く肌は褐色で、何より目を引くのはその大きな胸だった。彼女はルイズを見ると、にやっと笑った。

「おはよう。ルイズ」

「おはよう。キュルケ」

ルイズは顔をしかめながら、嫌そうに返事を返す。

「あら、そちらの方は？」

アリーナに気付いたキュルケは尋ねた。

ルイズが何かを言う前にアリーナが自己紹介を始める。

「はじめまして、ルイズの使い魔をすることになったアリーナよ。よろしくね」

キュルケは口を半開きにしてぽかんとした表情になる。

「ルイズ…」

「何よ？」

「召喚できなかったからって使い魔をでっちあげちゃダメよ」

「なんですって！？ツエルプストー！！」

「だって、人間の使い魔なんて聞いたことがないもの」

「アリーナはれっきとしたわたしの使い魔よ！見なさい！ちゃんとルーンだって刻まれてるんだから！」

ルイズはアリーナの左手を引っ張ってキュルケに見せる。

「あら、本当だわ。人間が使い魔になるなんて珍しいこともあるのね」

そう言ったところで、キュルケの後ろから真っ赤で巨大なトカゲが現れた。

「まあ、ヴァリエールの使い魔のことなんて、どうでもいいことだわ。それよりも見て！あたしの使い魔のフレイムを！」

そのトカゲは大きさが虎ほどもあり、尻尾が燃え盛る炎でできていた。

「わぁ！初めて見るモンスターだわ！」

アリーナがトカゲに近付く。

「これってサラマンダー？」

ルイズが尋ねる。

「そうよー。火トカゲよー。しかも、ここまで鮮やかで大きな炎の尻尾は絶対に火竜山脈のサラマンダーよ？ブランドものよー。好事家に見せたら値段なんかつけられないわよ？」

「そりゃ良かったわね」

心底どうでもいいという感じに返すルイズ。

「どうせ使い魔にするのなら、こういうのがいいわよねえ、フレイム」

そう言っつてフレイムのほうを見てみると、フレイムはアリーナにじゃれついていた。

「ウフフ、見掛けによらず可愛いわね、でも、本気で戦ったらどのくらい強いのかしら？」

その光景を見てキュルケは

「フレイムがあたし以外に懐くなんて！」

と驚いていたが、フレイムの方はアリーナに対して本能でこのように感じていた。

『逆らってはいけない』と。

キュルケと別れたあと、ルイズとアリーナは《アルヴィーズの食堂》で朝食をとった。

アリーナは食堂の豪華絢爛さもさることながら、朝食の豪華さにも驚いた。

その様子を見たルイズが得意気に

「すごいでしょう？」

と言ってきた。

「：確かにすごいけど、ちょっと無駄に豪華すぎないかしら？お金がもったいないと思うんだけど」

アリーナは少し呆れていた。

魔法学院の教室は大学の講義室のようになっている。

ルイズが適当な席に座ると、その隣にアリーナも座った。

生徒たちはみんなアリーナのことを『こんな人いたっけ?』と怪訝な目で見ていたが、当の本人は教室内の見たことのない生き物たちに心を奪われていて、全く気付いていない。

アリーナがルイズに生き物たちについての質問をしていると、紫色のローブに身を包んだ優しそうな雰囲気のおばさんが入ってきた。「皆さん。春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシュヴルーズ、毎年こうやって様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

シュヴルーズは教室内を見回し、ルイズのところで目をとめる。「特にミス・ヴァリエールは変わった使い魔を召喚したそうですね。オールド・オスマンから話は聞いています。何でも遠い異国の貴族を召喚したとか：使い魔さん、自己紹介をして頂いてもよろしいかしら?」

アリーナは対外的には遠い異国の貴族ということになっている。アリーナはまたもやルイズが何か言う前に、席を立ち自己紹介を始めた。

「はじめまして、みなさん！ルイズの使い魔をすることになったアリーナ・サントハイムよ！これからよろしくね！」

アリーナが自己紹介を終えると、驚きで一瞬教室が静かになった。それはもう、物音ひとつしないほどに。

「「「ええええええええ！?」「」」」

だが数秒後には大騒ぎになった。

「彼女は生徒じゃなかったのか!？」

「ゼロのルイズが貴族を召喚するなんてありえない!」

という声があちらこちらから聞こえる。

もし召喚されたのが平民であれば、ルイズは馬鹿にされていただろうし、また、アリーナを召喚した事実を自分から宣言していたら

誰もその事実を信じなかっただろうが、今回は教師であるシュヴルーズが『ミス・ヴァリエールが貴族を召喚した』と言ったため、信じざるを得なかった。

「みなさん、静かにしなさい！」

いつまで経っても騒いでいる生徒たちにシュヴルーズは注意をする。

すると、教室がようやく静かになる。

「《メイジの実力は使い魔を見ればわかる》という言葉があります。ミス・ヴァリエール、あなたはきつと素晴らしいメイジになるでしょう」

「ありがとうございます、ミセス・シュヴルーズ」

ルイズは照れながらお礼を言った。

「それでは、授業を始めますよ」

シュヴルーズは、こほんと重々しく咳をすると、杖を振った。

机の上に小石がいくつか現れる。

「わたしの二つ名は《赤土》。赤土のシュヴルーズです。土系統の魔法をこれから一年みなさんに講義します。魔法の四大系統は知っていますね？ ミスタ・マリコルヌ」

「はい、火・水・土・風の四つです！」

マリコルヌと呼ばれた太っちょの少年が答える。

「その通りです。その四つに、現在では失われた系統魔法である虚無を合わせて、全部で五つの系統があることはみなさんも知っておりです。その五つの系統の中で土系統は最も重要な地位を占めているとわたしは考えています。それはわたしが土系統だからというわけではありませんよ」

シュヴルーズは講義を続ける。

「土系統の魔法は――」

アリーナは講義に飽きてきていた。

もともと彼女は格闘技やスポーツなど、体を動かすことは大好きだったが、座学は大の苦手だった。

（というか、あたしが魔法の講義を聞いても、使えないんだから意味が無いわよね）

そんなことを考えながらしばらくぼーっと窓の外を見てみると、いつの間にかルイズが教室の前、シュヴルーズの横に移動しているのに気付いた。

どうやら机の上にある小石に何かの魔法をかけようとしているようだ。

それと今気付いたが、何故か生徒全員が机の下に隠れている。

アリーナは嫌な予感がして慌てて机のしたに隠れる。

次の瞬間、大爆発が起こった。

「見たでしょ？わたしの魔法。どんな魔法も爆発するのよ」

ルイズとアリーナの二人は目茶苦茶になった教室の後片付けをしていた。

あの大爆発で、教室中の窓ガラスがはじけ飛び、さらに爆発に驚いた使い魔たちが大暴れしたため、教室内は酷い有様だった。

シュヴルーズも失神してしまい、授業続行が不可能になったため、後片付けを命じられた二人以外の生徒は自由時間となった。

「魔法成功率ゼロ。だからわたしはゼロのルイズと呼ばれているのよ。あなたを召喚できたから今度こそは成功できるかもしれないと思ったのに……」

ルイズが呟く。

「でも、あたしは凄いのと思うわよ？こんな大爆発を起こせるなんて」「どういう意味よ!？」

アリーナを睨みながら怒鳴るルイズ。

「だって、普通は魔法を失敗したら何も起こらないでしょ？それに、その爆発魔法だって練習して射程とか規模とかを自由にできるようにしたら戦闘とかで使えると思うわよ？」

アリーナは本当に思ったことを口に出したのだが、ルイズはどう

やら馬鹿にされたと思ったようで、顔を真っ赤にしている。

「馬鹿にしないでよ!!! どうせあなたみたいに魔法が使える人間にはわたしの気持ちはわからないわよ!!!!」

ルイズは大声で叫んだ。

「へ? あたしは魔法使えないわよ?」

「え?... 使えないのお!?!」

「ええ、全然使えないわよ」

「でも、でも、あなた王女なんでしょ!?!」

「そうだけど... 王女と魔法が使えることに何か関係があるのかしら?」

この言葉にルイズは啞然とする。

ハルケギニアの常識では貴族や王族は全てメイジであり、平民は魔法が使えない。

なのでルイズはアリーナも魔法が使えるのだろうと思い込んでいたのである。

「魔法が使えないあたしには魔法のことはよくわからないわ。だけど、あたしから見ればルイズの爆発魔法は凄いと思うわよ」

「ふ、ふんっ! 魔法のことがわからないのに、そんなこと言わないでよ」

そう言いつつも生まれて初めて魔法を褒められて内心うれしいルイズであった。

「大変です! オールド・オスマン!」

コルベールが学院長室に飛び込むように入ると、床にうずくまっていたオスマンを彼の秘書のロングビルが蹴りまくっているのが見えた。と思った次の瞬間には、ロングビルは何事も無かったかのように机に座っていた。

オスマンも腕を後ろに組んで、重々しくコルベールを迎え入れた。「なんじゃね?」

「え?…あ、えーっと…あ、そうです!大変ですぞ!」

コルベールは一瞬見えた光景を幻覚かなにかだと思うことにした。
「大変なことなどあるものか。全ては小事じゃ、ミスタ…なんだっけ?」

「コルベールです!この学院に務めて20年になるんですから、いい加減覚えて下さい!」

「そうそう、そんな名前じゃったな。君はどうも早口でいかんよ。で、どうしたんじゃね?」

「これを見て下さい!」

コルベールはルーンのスケッチを見せた。

「何じゃね、これは?」

「ミス・サントハイムのルーンのスケッチです」

「ふむ、そうかね。で、これがどうかしたのかね?というか、昨日のゴタゴタの中でいつの間にルーンのスケッチなんかとっていたんじゃない?」

「そんなことはどうでもいいんです!これも見てください!」

そう言うとコルベールは古びた書物を見せた。

題名のところには《始祖ブリミルの使い魔たち》と書かれている。それを見た瞬間、一瞬オスマンの表情が厳しいものに変わる。

「ミス・ロングビル、すまんがしばらく席を外してもらえんかのう」
ロングビルの退室を見届けると、オスマンは口を開いた。

「詳しく説明するんじゃ。ミスタ・コルベール」

食堂に着くと、もうデザートが配られていた。

「はあ、やっぱり教室の後片付けに時間がかかりすぎたわね」
ルイズが嘆息する。

「ええ!?じゃあ昼食はどうするのよ?あたしもうお腹ペコペコよ!」

アリーナが世界の終わりかというような顔をする。

それを見たルイズは

「厨房に頼んで、後で用意してもらいましょう」

と笑いながら言う。

（うふふ、アリーナってけっこう子どもっぽいのね。王族と一緒に生活するなんてどうなることかと思ったけど、アリーナとならうまくやっていけそうだわ）

そう考えたところで突然食堂が騒がしくなった。

「どうしたのかしら？」

騒ぎの中心に向かうと、金髪の子ざな感じの少年と栗色の髪をした可愛らしい少女、見事なロール髪の少女の3人が揉めているようだった。

「何があったの？」

近くにいた生徒にアリーナが話を聞いてみると、金髪少年が落とした香水をメイドが拾ったことで、少年が栗色の髪の少女とロール髪の少女に二股をかけていたことがバレてしまったらしい。

「修羅場ってやつね……」

ルイズが呟く。

すると、栗色の髪の少女が金髪の少年の顔をグーで思いっきりぶん殴った。

少年は数メートル吹っ飛び、食堂の壁に叩き付けられた。

そして、

「さようなら!!」

と怒鳴って少女は去っていく。

「あの子、武闘家の素質があるわね。鍛えたら強くなりそうだわ」とは、アリーナの言葉。

そして、今度はロール髪の少女がテーブルのワインの瓶を掴み、少年の後頭部に思いっきり叩き付けた。ガシャンッ!という音とともに瓶が割れる。

「嘘つき!!」

と怒鳴り、ロール髪の少女も去っていく。

「あいつ、生きてるかしらね？」

ルイズが目の前惨状を見て言う。

少年の周りは赤ワインで水浸しになっていて、まるで殺人現場のようになっていた。

「あ、動いた」

少年は一度びくんつと痙攣すると、よろよろと立ち上がる。

そして、

「あのレディたちは薔薇の存在の意味を理解していないようだ」と芝居がかった仕草で言った。

「その君」

少し離れたところから様子を伺っていたメイドに声をかける。

「は、はいっ」

「君が軽率に香水のビンなんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「も、申し訳ありません！」

メイドは顔を真っ青にして謝った。

「あんなことがあった後なのに、メイドに八つ当たりする余裕があるなんて凄いわね。感心するわ。尊敬はしないけど」

ルイズが呆れたように言う。

「何あいつ。自業自得なのに他人に責任転嫁するなんて最悪だわ！」
アリーナは怒りをあらわにする。

「申し訳ありません！申し訳ありません！」

なおも謝り続けるメイドに少年は満足した様子で

「だが、僕も君のようなレディをいじめる趣味は無い。今回のことは君を僕の専属メイドにするということで手打ちにしようじゃないか」

と言った。

それを聞いたアリーナは少年の前に飛び出し、

「いい加減にしない！！！」

と怒鳴っていた。

第4話

「いい加減にしなさい!!!」

亜麻色の髪の少女、確かルイズの使い魔と言っていた女の子が自分の前に飛び出してきたのを見て、ギーシュ・ド・グラモンは何事かと驚いた。

「な、なんだね、君は？」

「二股をかけてた自分が悪いくせに、それを自分より弱い立場であるメイドのせいにして、挙げ句の果てには自分の専属メイドにしようとするなんて、恥ずかしくないの!？」

ギーシュの顔にさっと赤みが差した。

「いいかい、君?そもそも、二人のレディの名誉が傷ついたのは、そこにいるメイドが、香水のビンを拾い上げたせいだ。僕は彼女を僕の専属にするだけで許そうと言っているのだよ?逆に感謝をされてもいいぐらいの寛大な措置だ。そのどこに問題があるというのだね?」

「寛大な措置?はじめから彼女には何の責任もないのよ?それなのに責任転嫁をして、あたかも自分は何も悪くないかのようにしてるなんて、あなたは最低最悪の人間だわ!!!」

この言葉にギーシュがキレた。

「何だと!? 最低最悪の人間だと!? こんなに侮辱されたのは初めてだ!!! 決闘だ!!!」

「望むところよ!!!」

と、ここで、ギーシュがよろけて倒れそうになる。

後頭部を瓶で殴られたのに無理をし過ぎたようだ。

「そんな状態で決闘なんかできるのかしら?」

アリーナが挑戦的な口調で言う。

「ふざけるな。この程度なんということはない! 一時間後にヴェストリの広場で待っている」

そう言うとギーシュはふらふらしながら食堂を出て行った。

「ちょっと、ちょっと、アリーナ何してんのよ!？」

「ああ、ルイズ」

「ああ、じゃないわよ!なに決闘の約束なんかしてんのよ!？」

「だって、あんまりにもあのキザ男がムカついたんだもん。大丈夫よ、あんな奴に負けないわ」

アリーナは自信満々で言う。

「でも、あなたは魔法が使えないんでしょ?どうやって戦うつもりよ」

「腕つぶしと格闘には自信があるわ」

「まさか素手で戦うつもり!?絶対に勝てないわ!だいいち、あなたそんなに華奢なのに、腕つぶしに自信があるとか冗談でしょ!?!決闘なんかやめて!」

ルイズの顔が青くなる。

「平気よ。この前も言ったでしょ?あたしはすっごく強いって。それに、あんな奴にも勝てないようじゃルイズの使い魔失格だわ」

「諸君!決闘だ!」

ギーシュが薔薇の造花を掲げると、野次馬たちから歓声が巻きおこる。

「さて、逃げないで来たことは褒めてあげましょう」

「それはこっちの台詞だわ」

ギーシュのこめかみに青筋が浮かぶ。

先程よりも顔色が良く、足取りもしっかりとしている。

どうやら決闘までの一時間で医務室かどこかで治療を受けてきたようだ。

「僕も君のような可憐なレディを傷つけることは本意ではないが・
・君には先程の侮辱の罰を受けてもらう」

「御託はいいから、さっさと始めましょう」

アリーナは余裕のある表情でそう言い放つ。

そんな彼女をルイズは野次馬たちの一番前で心配そうに見つめていた。

あの後も、いくら止めてもアリーナの気持ちは変わらなかった。

（始祖ブリミルよ・・・どうかアリーナを御守りください！）

ルイズは始祖にアリーナの無事を必死に祈った。

「では、始めようか」

ギーシュが決闘の開始を宣言した。

「おっと、まだ名を名乗って無かったね。僕はギーシュ・ド・グラ
モン。《青銅》のギーシュだ。そして、これが僕のゴーレム《ワル
キューレ》さ！」

ギーシュが薔薇の造花を振ると、花びらが一枚、宙に舞う。

すると、甲冑を着た女戦士の形をしたゴーレムが現れた。

青銅でできたそのゴーレムは日の光を鈍く反射する。

「あたしの名前はアリーナ・サントハイム。ルイズの使い魔よ！」
アリーナも名乗りをあげる。

「さあ、君も杖を抜きたまえ！」

ギーシュがアリーナに言い放つ。

「いえ、あたしは魔法が使えないわ」

野次馬たちからざわめきが起こる。

「魔法が使えない、だと・・・」

ギーシュも哑然としている。

しかし、

「あたしの武器はこの拳よ！」

アリーナがそう言い放った数秒後、凄い音と共にワルキューレの
胴体に穴が空く。

「え？」

ギーシュは何が起こったのかわからなかった。

いつの間にか自分の正面にいたアリーナが倒れたワルキューレの目の前にいる。

「ま、まさか・・・」

ギーシュは理解した。アリーナがワルキューレを破壊したのだと。「く、くそっ！」

ギーシュは慌てて薔薇の杖を振り、新たに六体のワルキューレが現れる。

そのうち一体を自分の前に配置し、残りの五体で一斉にアリーナに襲いかかった。

「遅いわ！」

だがアリーナは踊るような動きで攻撃をかわしながら、あっという間に五体のワルキューレを倒してしまった。

「そ、そんな・・・馬鹿な・・・」

呆然としている間に自分の前に配置した最後のワルキューレも倒される。

「ひいっ！」

アリーナはギーシュの目の前に立つと言った。

「まだ続ける？」

ギーシュは激しく首を横に振る。

そして震えた声で言った。

「ぼ、僕の・・・負けだ・・・」

広場を沈黙が支配した。

野次馬たちもあまりの驚きに誰も声を発さない。

しばらくして、その沈黙を破ったのはルイズだった。

「・・・凄い・・・凄いわ！アリーナ！流石はわたしの使い魔ね！
！」

そう言うところ、ルイズはアリーナに駆け寄って抱きついた。

「わ！ちよつとルイズ！」

それをきっかけに、野次馬たちから歓声が沸き起こった。

オスマンとコルベールは《遠見の鏡》で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。

「彼女、勝ってしまいましたね・・・しかも素手で」

「ふむ・・・そうじゃのう・・・」

「《ガンダールヴ》の能力は武器を持たないと発動しないはずですから、つまり、彼女が見せたあの身体能力は、もともと彼女に備わっていたものということになります・・・」

「うむむ・・・」

「どうでしょうか、オールド・オスマン。やはり、《ガンダールヴ》のことだけでも王室に報告を・・・」

「それには及ばん」

オスマンは重々しい声で答えた。

「なぜですか？」

「ミスタ・コルベール、《ガンダールヴ》はただの使い魔ではない」「その通りです。始祖ブリミルの用いた伝説の使い魔、《ガンダールヴ》。その強さは千人もの軍隊をひとりで壊滅させるほどの力を持っていたとか・・・」

「その《ガンダールヴ》を王室のボンクラどもに渡したらどうなるかね？ましてや、今度の《ガンダールヴ》は能力を発動していない状態であの強さじゃ。きつと戦争でも引き起こすに決まっておる。宮廷で暇を持て余している連中は戦が好きじゃからな」

「はあ。学院長の深いお考えには恐れ入ります」

「この件はわしが預かる。他言は無用じゃよ、ミスタ・コルベール」

「お腹空いた」

アリーナとルイズは厨房に向かっていた。

昼食を食べ損ねた上に、決闘騒ぎで厨房に食事を頼みにいけなかったため、二人とも空腹であった。

「それにしても、さっきのアリーナは凛々しくて本当に格好良かったわ！」

ルイズは決闘が終わってからずっとこの調子で、アリーナを褒めまくっている。

ルイズだけでなく、決闘の後、アリーナは女子生徒たちから『お姉さま』と呼ばれ、しばらく彼女たちに取り囲まれていた。

厨房に着くと、中年の男性コックがアリーナにいきなりお礼を言ってきた。

「私はこのコック長をしておりますマルトーといいます。シエスタを助けて頂いてありがとうございます！貴族様。ほらシエスタ、お前もお礼を言え」

「わたしのような使用人のために決闘までして下さって・・・本当にありがとうございます！」

シエスタは若干緊張した様子で感謝の言葉を述べる。

「感謝されるほどのことじゃないわ。ただあいつのことがムカついたから、あのキザな男のプライドを叩きつぶしてやっただけよ。それとあたしには敬語は使わなくていいわよ。堅苦しいのは嫌いだし」

アリーナがそう言ったのを聞いて、マルトーとシエスタが驚きの表情になる。

「本当に敬語でなくてよろしいのです？」

「ええ。逆に敬語を使われたほうが嫌だわ」

その言葉を聞いた途端、マルトーの口調ががらりと変わる。

「なんて謙虚な嬢ちゃんだ！決闘であれだけ強さを見せた後なのに、全く誇らない！更には貴族なのに平民の俺たちに敬語を使わなくていいと言ってきた！気に入ったぜ、何か困ったことがあったら何でも言いな！」

いくら敬語を使わなくていいと言われたって貴族に今の口調は不味いだろうとシエスタが顔を青くするが、

「じゃあ早速だけど、部屋に食事を二人分用意してもらってもいいかしら？昼食を食べてなくてもうお腹がペッコペコで・・・」

アリーナは全然気にしたふうも無く、昼食の用意をお願いしていた。

「ちょっとアリーナ！何で平民なんかにため口なんか許したのよ！」
厨房を出た後、ルイズはアリーナに詰め寄った。

「何かまずかったかしら？」

「普通貴族が平民なんかにそんなことを許さないでしょ！？平民たちが調子に乗るわ！あなたには貴族の誇りが無いの！？」

「貴族の誇り、ね・・・確かに王女のあたしが平民にため口を許すなんて誇りが無いと思われても仕方がないことだと思うわ。でも、偉そうにして平民を見下すのが貴族の誇りなのかしら？あたしはそうは思わないわ。人々の模範となって民衆を導いていくこと、それが王族や貴族の役割なんじゃないかしら？それに、さっきの決闘騒ぎの時も思ったけれど、この国では平民の地位が低すぎるわ。あたしたち王族や貴族は、平民たちの働きが無ければ食事をするくらままならないのに・・・だから、あたしはこのことに関しては何と言われようとも自分の気持ちを曲げるつもりは無いわ・・・まあ、あたしが堅苦しいのは嫌いっていうのも大きな原因なんだけだね」

「・・・そう。そんなに深く考えてのことだったのね。だったらわたしは何も言わないわ。それに、何を言われても気持ちを曲げるつもりが無いのなら言うだけ無駄なものね」

アリーナの言葉を聞いて、そう答えるルイズだった。

第5話

アリーナが召喚されて数日が経った。

授業は初日で飽きてしまったので、授業がある午前中はひとりで学院内を見て回ったり、部屋でトレーニングをしたりして過ごしている。

学院の廊下を歩いていると、反対側からシエスタが歩いてくるのが見えた。

「おはよ、シエスタ」

「あら、アリーナ様、御機嫌よう」

この数日間で二人はかなり打ち解けあっていた。

だが、やはり貴族のアリーナに敬語を使わないのは『恐れ多い』そうなので、シエスタはアリーナと会話する時も敬語を使っていた。

アリーナは城でも使用人たちに公式の場合以外では敬語を使わなくていいと言っているのだが、やはり彼らも『姫様にため口で話すなど恐れ多い』そうで、敬語を使っていた。

普通は誰でもそうなるのだから、あつさりため口で話すことを受け入れたマルトーは変わり者だと言える。

二人で歩きながら話しをしているとギーシュが現れた。

「何の用かしら？」

アリーナは顔を青くしたシエスタを後ろにかばうようにしながらたずねる。

「今日は君たちに謝りに来たんだ。そんなに警戒しないでくれたまえ」

「「え？」」

「この間は本当にすまなかった。特に、シエスタと言ったかい？君には嫌な思いをさせてしまったね。君に八つ当たりをして気を紛らわそうとした僕はミス・サントハイムの言うように最低の人間だったよ。二人とも、許してくれ」

ギーシュは普段のキザな態度ではなく、真剣な表情で謝った。

「そ、そんな！許しますから、わたしなんかに頭を下げないで下さい、貴族様！」

シエスタは貴族に謝られて、わたわたと慌てている。

「なんで今更謝りに？」

アリーナが疑問に思ったことを口にする。

「いや、実を言うと決闘が終わった後すぐに謝りたかったんだが…その、謝り辛かったというか、ミス・サントハイムが怖かったというか…だけど、今偶然君たちを見掛けたから思い切って」

若干しどろもどろになりながら答えるギーシュ。

「ヘタレ」

「そんなこと言わないでくれたまえよ…」

ギーシュはがっくりと肩を落とした。

「冗談よ。まあ、許してあげるわ。これに懲りたらもうあんなことはしないようにね。あと、あたしのことはアリーナでいいわ」

「本当かい！？ありがとう！アリーナ、シエスタ！」

午後になり、授業が終わるとルイズはアリーナと広場でお茶していた。

「って、何でギーシュ、あんたまでいるのよ！？」

「いや、アリーナが僕のことを許してくれたから、この機会に彼女ともっと親交を深めようかと思ってね」

「あんた、モンモランシーと仲直りしたんでしょ？それなら二人でいちゃついていた方がいいじゃない！」

ルイズがそこまで言ったところで、突然ギーシュが吹っ飛んだ。

「ギイシュウゝあんたはまた私以外の女の子に手を出そうとしたのねえゝしかも今度はお姉さまを誑かそうとするなんて、どこまで見境がないのかしらあゝ」

お腹に響くような低い声でそう言いながら、見事なロール髪の少

女、モンモランシーが現れた。

「ひいっ！！誤解だモンモランシー！！彼女とはただお茶してただけ…ぶほおっ！？」

モンモランシーの怒りが籠った会心の一撃がみぞおちにヒットし、再び吹っ飛ぶギーシュ。

「ふんっ！今度こそもう知らない！！あんたの顔なんか二度と見たくないわ！！」

そう言い残すとモンモランシーは去っていった。

「自業自得ね。いい気味だわ」

痙攣しながら泡を吹いているギーシュを見てルイズは呟いた。

「なかなかいいパンチだったわね。彼女も武闘家のセンスがあるわ」

一方アリーナは、決闘前にギーシュが別の少女に吹っ飛ばされた時と同じような感想を漏らすのだった。

第6話

ページをめくる音が部屋に響く。

部屋の中では青髪碧眼の少女が黙々と本を読んでいる。

彼女、タバサは虚無の曜日が大好きだった。

授業がないので、朝から晩まで一日中自分の部屋で本を読んでいるからだ。

だが、そんな至福の時も突然の乱入者によって破られる。

入ってきたのは、彼女の数少ない友人であるキュルケだった。

キュルケはタバサに向かって何事か喚いたが、タバサは《サイレント》の呪文を唱えて、キュルケの声が耳に届かないようにした。すると、キュルケはタバサの読んでいた本を取り上げた。

タバサは本を取り返そうとするが、背の高いキュルケが本を高く掲げると、それだけで小柄なタバサの手は本に届かなくなる。

仕方なく《サイレント》を解くと、途端にキュルケの言葉が耳に飛び込んできた。

「タバサ、出かけるわよ！早く仕度をして頂戴！」

「今日は虚無の曜日」

「わかってる。あなたにとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしには痛いほどよくわかってるわよ。でも、そんなこと言ってる場合じゃ無いのよ！アリーナがルイズと馬で出掛けたの！あたしは二人を追いかけなきゃいけないのよ！でも、あなたの使い魔じゃないと追いつけないわ！だから助けて！」

アリーナの名前を聞いてタバサの眉がぴくりと動いた。

「わかった」

「本当！？じゃ、追いかけてくれるのね！ありがとう！」

「いい。私も彼女には少し興味がある」

「あら、あなたが他人に興味を持つなんて珍しいわね」

「決闘の時に彼女が見せた動き、私でも目で追えなかった。彼女は

ただ者じゃない」

「あゝ、まあ、確かに。素手でワルキューレに穴を空けてたしね」
タバサは窓を開けると口笛を吹いた。それから、窓枠によじ登り外に飛び降りた。

それにキュルケも続く。

タバサの部屋は五階にある。

なので、このまま落下すれば非常にスプラッタな光景が広がることになるのだが、そうなる前に一頭の風竜が二人を受け止めた。

「いつ見ても、あなたのシルフィードは惚れ惚れするわね」

キュルケが背びれに捕まりながら感嘆の声をあげる。

そう、タバサが使い魔にしたのは風竜の子どもであった。

「どっち？」

タバサは短く尋ねる。

「あゝわからないわ、慌ててたから」

キュルケの返答を聞き、シルフィードに命令を出す。

「馬二頭。食べちゃダメ」

シルフィードに命じるとタバサはキュルケの手から本を奪い取り、読書を再開した。

アリーナとルイズはトリステインの王都、トリスタニアを歩いていた。
「まずは服を買いましょう」

「そうね、いつまでもルイズの服を借りるわけにはいかないものね」
アリーナは着の身着のまままで召喚されたので、昼間はオスマンから貰った制服で過ごしていたが、夜はルイズの寝間着を借りていた。
トリステインで最も大きな通り、ブルドンネ街をルイズ行き着けの服屋に向かって歩いていると、ひとりの男がルイズにぶつかった。
「気をつけなさいよ！」

ルイズが文句を言うが男は黙って立ち去ろうとする。

だが、男の手首をアリーナが掴んだ。

「返さない」

男はアリーナの手を引きはがそうとするが、アリーナは手に力を入れる。

「痛えっっ！」

「それともここで骨を折ってあげようかしら？」

「ちっ！」

男が財布をアリーナに渡すと、アリーナは男から手を離れた。男は小走りで人込みの中に消えていく。

「い、今の何？」

それまでの出来事を呆然と眺めていたルイズが尋ねる。

「スリよ。ルイズ、あなたは財布をすられたのよ」

「えっ！？嘘！？」

ルイズは慌てて懐を探るが、確かに財布が無くなっていた。

「ほら、次からはもっと気をつけるのよ。特に人込みの中では」

そう言いながらアリーナは男から取り返した財布をルイズに渡した。

そんな二人を影から眺める二つの人影があった。

「いらっしやいませ、ルイズお嬢様」

アリーナとルイズはトリスタニアの一角にある貴族専門の服屋にいた。

「今日はわたしじゃなくて、彼女の服をお願いしたいの」

「かしこまりました」

そう言うと店員はサイズを測るためアリーナを店の奥に案内した。この店の服は全てオーダーメイドで、ルイズは新しい服が欲しい時はいつもこの店を利用していた。

しばらくするとアリーナが戻って来る。

デザインの見本を見ながら、ルイズがどんな服がいいか聞くと

「あたしはそういうことはよくわからないから、ルイズが好きな
を選んでいいわ」

と答えた。

「よくわからないって…それって年頃の女の子としてどうなのよ」
そう言いながらも、結局ルイズがアリーナの服のデザインを選ん
だのだった。

「あら、ルイズじゃないの。奇遇ね」

ルイズが店を出ると、キュルケとタバサに出くわした。

「キュルケ！？何であんたがここにいるのよ！」

「あたしも買い物に決まってるじゃない」

続けてアリーナが店から出てくる。

アリーナを見た途端、キュルケがアリーナに抱きついた。

「うわ！？な、何なに！？」

いきなりのことに動揺するアリーナ。

「大好きだわ！アリーナ！」

「「「え？」」」

突然の告白にキュルケ以外の三人が固まる。

「あなたがギーシュを倒した時の姿…かっこよかったわ。あたしが
今まで見てきたどんな殿方よりもよ！あたしはあれを見て痺れたの
よ！…でも、あたしも女の子を好きになったことがこれまで無かつ
たから、戸惑ったわ。この気持ちは何なのかしらって。だけど、さ
っきあなたがスリを追い払ったのを見た時にわかったわ！この気持
ちは愛よ！愛なのよ！」

キュルケの言葉にしばしあっけにとられる三人。

「彼女は女性」

一番最初に再起動に成功したタバサが突っ込む。

「愛の前には性別なんて関係ないわ！」

「いや、多いに関係あるわよ」

続けて正気に戻ったルイズが突っ込んだ。

「とにかく、愛してるわ！アリーナ！」

「…あ、えーと…とりあえず離してくれないかしら」

ようやく現実を意識が戻ってきたアリーナがキュルケに言う。

「あ、そうよね。こんな公衆の面前で抱き合うのは恥ずかしいわよね」

キュルケはアリーナを解放した。

「ところで、この後時間あるかしら？あなた召喚された時に着てた服と制服以外に服を持ってないんでしょ？あたしの愛の証として、是非とも素敵な服をプレゼントしたいのよ！」

「アリーナの服ならわたしが選んで今さっき注文したから、あんたのプレゼントなんていらないわよ、ツエルプストー」

キュルケの言葉にルイズが反発する。

「ヴァリエールが選んだ服なんて、どうせ地味でダサいに決まってるわ。そんなのアリーナには似合わないわよ」

「何ですってえ！？」

「ねえ、アリーナ良いでしょ？あたしに服をプレゼントさせて！」

頭から湯気が出そうなほど怒っているルイズを放って、キュルケはアリーナに言う。

「あたしは良いけれど…」

「ダメよ！アリーナ！ツエルプストーの人間からは服だろうが何だろうが、とにかく何も貰っちゃダメ！」

「あら、アリーナは良いって言ってるのよ？あなたの使い魔とはいえ彼女は貴族なのよね？つまりあたしたちと対等の立場よ。だからルイズ、あなたに自分の考えをアリーナに強制する権利は無いはずよ」

「う…それはそうだけど…」

ルイズは小さな声で呟いた。

「さっ、行きましょ、アリーナ」

キュルケがアリーナを促す。

「でも、ルイズがダメって言ってるし：一応あたしはルイズの使い魔だし：」

珍しく歯切れの悪いアリーナ。

「ルイズの言ったことなんて気にしないでいいわよ。早く行きましようよ」

しばらくこんなやり取りが繰り返された。
すると、

「：はあり、もういいわよ。アリーナ、服でも何でも貰いなさい」とルイズが言った。

「ルイズ、良いの？」

アリーナが尋ねる。

「いいわよ。あなたの好きなようにしなさい」

「ほら、ご主人さまの許可もおりたし、行きましょう！」

キュルケはそう言うときアリーナの手を引っ張って歩いて行った。

「ここよ！」

キュルケに案内されて着いた店には、派手で露出の高い服ばかりが飾られていた。

「このドレス：悔しいけれど、わたしが着たら胸のところがストンと落ちるわね」

「私も同意」

ルイズとタバサが店内の服を物色しながらそんな会話をしている。その間にキュルケは店内にあった服を何着か選ぶと、アリーナのところに持っていった。

「これなんてどうかしら？」

「ちょっと胸のところが開き過ぎじゃないかしら」

「何言ってるのよ。あなた胸もけっこう大きいし背はちょっと低いけどスタイル良いんだから、こういう服を着ないと損よ！」

結局、キュルケが選んだ、店の中でも特に露出度が高めのドレス

や服を何着か購入して、店を出た。

ルイズ、アリーナ、キュルケ、タバサの四人はルイズの提案で一軒のカフェにいた。

ちなみに注文は四人ともクックベリーパイである。
ルイズが、

「このクックベリーパイは絶品なのよ！」

と言ったので、みんな食べようということになったのである。
しばらくして注文したクックベリーパイが運ばれてきた。

「んふー。やっぱりこのクックベリーパイは最高だわー」

一口食べた途端、普段のキツめの顔が想像出来ないほどにルイズの表情がとろける。

「：これまでに食べたクックベリーパイの中でダントツに美味しいわ」

キュルケが驚きの表情で言った。

「激しく同意」 タバサも、一見いつもの無表情に見えるが、目の奥をキラキラさせながらパイを食べている。

「あたしもこんなに美味しいパイは初めて食べたわ！」

アリーナも気に入ったようである。

「そうでしょー。甘酸っぱく芳醇なクックベリーとサクサクのパイが織り成す絶妙なハーモニー：わたしはこの世にこの至高のパイよりも美味しいものがあるとは思えないわー」

相変わらずとろけまくった顔でパイを褒めちぎるルイズ。

四人の間にしばらく幸せな空気が流れた。

「はあー、美味しかったあー」

クックベリーパイを食べ終えた四人は食後の紅茶を飲んでいた。

「この後どうする？何処に行きたいところあるかしら？」

ルイズが全員に聞く。

「あ、武器屋に行ってみたいわ」

「武器屋？」

ルイズとキュルケが同時に言った。

「アリーナ、あなた、素手でもそんなに強いのに剣も扱えるの？」

「剣は扱えないわよ。あたしが使えるのはツメとかよ」

「爪？爪って手や足の？」

「違うわよ。あたしが言うツメは鉄やいろいろな素材で作られた、腕にはめ込むタイプの武器のことよ。…もしかして、この国にはそういう武器無いの？」

アリーナが三人に聞く。

「わたしはそんな武器、聞いたことないわ」
ルイズが答える。

「あたしも知らないわよ。タバサ、あなたはどうか？」

タバサは首を横に振る。

「あたしとタバサはゲルマニアとガリアからの留学生よ。あたしたちが知らないとなると、トリステインじゃなくてハルケギニアにはアリーナの言う武器は無いかもしれないわね」

キュルケが自分の考えを述べる。

「そんなあ…」

（異世界だから未知の強力なツメがあるかと思ったのに…）

「まあ、とりあえず武器屋に行ってみましょう。もしかしたらアリーナの言った武器があるかもしれないし」

少しへこんでいるアリーナを元気づけるようにルイズは言った。

店の中は薄暗く、ランプの灯がともっていた。

壁や棚には所狭しと剣や槍が乱雑に並べられていて、立派な甲冑が飾られている。

カウンターの向こうでパイプをくわえていた店主が、店に入って

きたルイズたちを見て、慌てて飛び出してきた。

「き、貴族様！うちは真っ当な商売をしてまさあ。お上に目をつけられることなんか、これっぽっちもしてませんや」

「客よ」

ルイズが腕を組んで言った。

「こりやおったまげた！貴族様が武器をお使いに？して、どのような武器をご所望で？」

店主が愛想笑いを浮かべながら言う。

「ツメという武器はあるかしら？」

アリーナが尋ねた。

「ツメ：でございやすか？生憎うちではそんな武器は扱っておりやせんな」

「そう…」

それを聞いて些か落胆するアリーナ。

「ほら、落ち込まないで！あなたが落ち込んだらあたしも悲しいわ！何か気に入るものがあるかもしれないから、ちょっと見てみましょうよ」

キュルケはアリーナを連れて店内を見て回った。

「それにしても地味でパツとしない武器ばっかね。もっと派手で見栄えのいいものはないのかしら」

「武器のことがわからねえくせに文句言ってるじゃねえ！」

キュルケが剣や槍を見ながら言うと、低い男の声がした。

「誰？」

声のした方に全員の視線が集中する。

だが、そこには乱雑に積まれた剣があるだけだった。

「何よ、誰も居ないじゃない」

「おめえの目は節穴か！」

鏢をカタカタとさせながら、一本の剣から声が発される。

何と声の主は錆の浮いたボロボロの剣だった。

「凄い！喋る剣なんて初めて見たわ！」

アリーナはそう言って、喋る剣に近付いた。

「やい、デル公！お客様に失礼なこと言うんじゃないやねえ！」

店主が怒鳴る。

「お客様？こんな、剣のことを何も知らないような貴族の娘っ子たちがお客様？ふざけんじゃねえ！」

店主の言葉に喋る剣も怒鳴り声で返す。

「それってインテリジェンスソード？」

ルイズが尋ねる。

「そうでさ、お嬢さま。意識を持つ魔剣、インテリジェンスソードでさ。一体、どこのメイジが剣を喋らせるなんて馬鹿なこと始めたんでしょうかねえ。とにかくこいつはやたらと口は悪いわ、客に喧嘩は売るわで困ってやして…やいデル公！これ以上失礼があったら、貴族様に頼んでてめえを溶かしちまうからな！」

「おもしれえ、やってみろ！どうせこの世にやもう飽き飽きしてたところさ！溶かしてくれるんなら上等だ！」

「もったいないわよ。こんな珍しい剣を溶かしちゃうなんて」

剣を手取るアリーナ。

「…おでれーた。てめ、《使い手》か」

「《使い手》？」

「ふん、自分の実力も知らねえのか。まあいい。てめ、俺を買え」

「わかったわ。ルイズ、この剣が欲しいのだけど」

「ええー…そんなボロボロでさびさびの剣を？というか、あなた剣は使えないんじゃないやなかったの？」

ルイズが疑問を口にする。

「使えないけど、おもしろいじゃない！喋る剣なんて！話相手ぐらいにはなるわ。だから、買って？」

「…わかったわ。アリーナが気に入ったのならそうする」

アリーナに頼まれると断れないルイズであった。

「待った！！そのインテリジェンスソードはあたしがアリーナにプレゼントするわ！おいくら？」

「へい、エキュール金貨で二百、新金貨なら三百で結構でさ。若奥さま」

キュルケは代金の入った袋をカウンターの上に置いた。
が、店主がそれに手を伸ばす前にルイズが金貨の詰まった袋を奪い取った。

「ちよつと何するのよ、ヴァリエール！」
キュルケが抗議の声をあげる。

「この剣の代金はアリーナの主人であるわたしが払うわ！ わかったらゲルマニアの下品な色ボケ貴族は引っ込んでなさい！」

「誰が下品で色ボケですって？ あんただってチビで胸も無いくせにプライドばっか高くてどうしようもないじゃない！」

「何ですってえ！？ ツエルプストー！」
ルイズとキュルケが口論を始めた。

「だいたい何であんたわざわざトリステインの魔法学院に留学なんかしてんのよ！ おおかた男を漁り過ぎてゲルマニアの魔法学院を退学にでもなったんでしょ！」

「ゼロのルイズ！ あんたこそ何で魔法学院にいるのよ？ いくらやつても魔法が成功しないんだから、荷物まとめてとっと自分の領地に逃げ帰ったらどうなのよ！？」

アリーナが二人のやり取りを苦笑しながら眺めていると、タバサが店主に金貨を渡していた。

「あら、タバサ、あなたが買ってくれるの？」

タバサはうなずく。

「あの二人に任せてたらいつまで経っても帰れない」

タバサは抑揚の無い声で言った。

「毎度」

金貨を数え終わると、店主は剣を鞘に収めてアリーナに手渡す。

「五月蠅いと思ったら、こうやって鞘に入れればおとなしくなりま
さあ」

「わかったわ」

そう答えると、アリーナは武器ではなく話相手として購入した喋る剣を受け取った。

第7話

「全くもう、アリーナってばいつの間にかタバサに剣を買ってもらってるんだから…」

ここはルイズの部屋。

あの後もルイズとキュルケは口論を続けたのだが、タバサが剣を買ったのがわかると、二人とも馬鹿らしくなってやめたのだった。

「そういえばまだ名前を聞いてなかったわね。何ていうのかしら？」

「俺はデルFRINGガー様だ。よく覚えておけ、嬢ちゃん」

アリーナは先程から喋る剣、デルFRINGガーと話をしている。

「もう夜も遅いし寝ましようよ」

ルイズが眠たそうな声で促す。

「あ、そうね。デルFRINGガーとの会話に夢中で気付かなかったわ」

「俺はまだ嬢ちゃんと話がしたふごっ!？」

「ごめんね、また明日話しましょう」

アリーナはデルFRINGガーを鞘に収めると、先日用意してもらった真新しいベッドに入る。

ルイズもランプを消すと自分のベッドに入った。

「おやすみ、ルイズ」

「おやすみなさい、アリーナ」

ルイズの部屋の明かりが消えた数十分後、薄暗い学院の廊下をひたひたと歩く人影があった。

その人物は寝静まった学院内を進み、階段を降りて中庭へ出た。

月明かりに照らされ、その人物の顔があらわになる。

現れたのはネグリジェにマントを羽織ったルイズだった。

「よし、誰もいないわね」

ルイズは辺りを見回すと、魔法を唱えた。

途端に爆発が起こる。

（特訓して、いつかアリーナが言ってたみたいに自分の好きなように爆発が起こせるようにしてみせるんだから！）

ルイズは数日前から密かに爆発魔法の練習をしていたのだ。

おかげで、最近では威力の調整が少し出来るようになっていた。何回か魔法を放っていると、そのうちのひとつが学院の本塔の壁で爆発した。

「うーん、狙った場所で爆発させるのはやっぱり難しいわね」

そう言ったところで突然、中庭が暗くなった。

「え、何？」

ルイズが振り返ると、そこには土でできた巨大なゴーレムがいた。

「ひぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

「うえ！？ なな、なにになになになにに！？」

アリーナは耳を劈くともんでもない大ききの音に飛び起きた。

「い、今の何？ 叫び声？」

窓の外を見てみると巨大な黒い影が歩き去っていくのが見えた。

「な、何あれ？ ルイズ、あなたも見て……って、居ない！？」

ルイズのベッドはもぬけの殻であった。

「……もしかして、さっきの叫び声はルイズの？」

（そういえばルイズの声に似てた気がするわ。でも、叫び声をあげたということはルイズに何か危険が迫ってるってこと！？）

アリーナは慌てて部屋を飛び出した。

廊下にはたくさんの生徒がいた。

「あ、キュルケ！」

生徒たちの中からキュルケを見つけるとアリーナは小走りで近寄った。

「アリーナ！一体さっきの叫び声は何だったの！？みんな驚いて部屋から飛び出したわよ！しかも、その次には巨大なゴーレムが現れるし、もう何がなんだかわからないわよ！」

キュルケは軽くパニックに陥りながら、アリーナの両肩を掴んでぶつぶんと揺さぶる。

「ちよっ、ちよっと落ち着いて、キュルケ。ねえ、ルイズ見なかった？」

「ルイズ？ルイズなんて知らないわよ！どうかしたの！？」

未だ興奮した様子でキュルケは尋ねた。

「部屋に居ないのよ。もしかしたらさっきの叫び声はルイズのものかもしれないわ。どこから声がしたかわかるかしら？」

「ええと、寝てたし突然だったからわからないわ。タバサ、あなたわかる？」

キュルケは傍らにいるタバサに聞く。

「たぶん、中庭」

タバサはいつもの単調な声で言った。

「わかったわ！ありがとう、タバサ！」

アリーナはタバサの言葉を聞くと中庭に向かって走り出した。

（ルイズ、どうか無事でいて…）

廊下を駆け、階段を降りて、中庭に飛び出したアリーナが見たのは、気絶したルイズの姿だった。

目を覚ますと、辺りはまだ薄暗かった。

（あら……？ちよっと早く起きすぎたわね…二度寝しようかしら…）
寝ぼけた頭でぼんやりと考えていると、

「ルイズ、起きたの！大丈夫！？」

という声とともに肩を掴まれる。

「ふえ？大丈夫って何が？」

ベッドに横になっている自分に、上から覗きこむようにして話し

かけてきたアリーナに尋ねた。

「何って…あなたは中庭に倒れてたのよ。大丈夫？どこか痛いところはない？」

徐々に意識が覚醒していき、記憶が戻ってくる。

「あ…そうだわ！巨大なゴーレムが現れたのよ！あのゴーレムはどうしたの！？」

「あー、そのことなんだけど…」

ルイズは今巷で話題の盗賊、《土くれ》のフーケがああの大なるゴーレムを操っていたこと、そして、フーケがゴーレムを使って学院の宝物庫に穴を開け、宝を盗み出したことを聞いた。

「まさか学院にフーケが現れるなんて…」

「学院長がフーケのゴーレムが現れた時の様子が聞きたいと言っていたから、後で学院長室まで行きましょう」

アリーナはフーケが現れたことに驚いているルイズに言った。

学院長室に入ると、怒号が飛び交っていた。

「《土くれ》め！貴族の屋敷だけでは飽き足らず、魔法学院までも標的にするとは！」

「衛兵は一体何をしてたんだ！？」

「衛兵など当てにならない！所詮は平民ではないか！それよりも当直の貴族は誰だったんだ！？」

シュヴルーズがビクリと震えた。

「…も、申し訳ありません…昨夜の宿直はわたしです…」

消え入りそうなほど小さな声でシュヴルーズは言った。

「秘宝、《平和の杖》が盗まれたのはあなたのせいですが、ミセス・シュヴルーズ！あなたが宿直をサポートしていなければ盗難を防げたかもしれないかったのに！」

「ほ、本当に申し訳ありません！…で、でも、宿直を真面目にしている人なんてほとんど居なかったじゃないですか…そ、それに、

今月の宝物庫の管理の当番はミスタ・ギトー、あ、あなたですよね？…だ、だったら、わたしだけの責任とは言えないんじゃないですか？」

震えた声で反論するシュヴルーズにギトーと呼ばれた男性が怒鳴る。

「ミセス・シュヴルーズ！あなたは秘宝を奪われた責任が私にもあるというのかね！？確かに私は宝物庫管理の当番だったが、全責任は宿直だったあなたにある！」

「まあまあ、落ち着くんじゃ二人とも」

責任の擦り付けあいが始まったところでオスマンが二人を宥めた。
「ですが！」

「とにかく落ち着きたまえ、ミスタ…なんだっけ？」

「ギトーです！今さっき名前が出たばかりじゃないですか！」

「そうそう、そんな名前じゃった。ギトーくん、すぐに大声で怒鳴るのは君の悪い癖じゃよ。ましてや、今は生徒の前じゃ。とにかく冷静になりたまえ」

オスマンがそう言ったところで、ギトーは初めてルイズとアリーナに気付いたようだった。

「見苦しいところを見せてしまったのう」

「あ、いえ、そんなことは…」

ルイズがたどたどしく答える。

「では、早速じゃが犯行時の様子を教えてもらえんかのう」

「あ、その、目の前に巨大なゴーレムが現れたのは見たんですけど…踏みつぶされそうになって気絶してしまっただけ」

オスマンと彼の傍にいたコルベールが顔を見合わせる。

「では、犯行の瞬間は見ていないんだね？」

コルベールがルイズに確認する。

「はい。…お力になれず、申し訳ありません」

「いや、いいんじゃない。現場にいた君ならフーケの犯行の瞬間を見ていたと勝手に考えていたのはわしらなんじゃから」

オスマンがルイズに言った。

「でも、そうなると手掛かりはゼロですな：現場にはフーケの手掛かりになるような物は何もありませんでしたし」

コルベールがそう言ったところで、ドアが開きロングビルが入ってきた。

「この非常時に何処に行っておったんじゃ、ミス・ロングビル」

オスマンが尋ねる。

「申し訳ありません。朝から急いで調査をしておりましたの」

「調査？」

「はい。朝起きてみたら秘宝が盗まれたと大騒ぎじゃありませんか。しかも、それがハルケギニア中の貴族を震えあがらせている世紀の大怪盗フーケによるものだ所知り、すぐに調査を致しました」

「仕事が早いのも、流石はわしの秘書じゃ」

オスマンが満足そうにうなずく。

「で、結果はどうだったんですかな？」

コルベールが促した。

「フーケの隠れ家が判明しました」

「な、何ですと!？」

コルベールが素頓狂な声をあげる。

「場所は何処じゃね？」

「徒歩で半日、馬で四時間ほどの森の中です。近くの村の住民に話を聞いたところ、今日の朝早くに黒いローブを纏った怪しい男が森の中にある廃屋に入っていくのを見たそうです。きっと、その男がフーケに違いありませんわ」

落ち着き払った様子で説明するロングビルとは対照的に、コルベールは興奮した様子で言う。

「お、王室衛士隊に連絡して、すぐに兵をその森に送ってもらいましょう！」

「いや、それには及ばんよ。そんなことをしていたら、その間に『平和の杖』を持ってフーケは逃げてしまうじゃろう。それに、自分

の身にかかる火の粉を払えんようで何が貴族じゃ。ここは教師の中から搜索隊を出すことにしよう」

オスマンが言った途端、室内の空気が重くなる。

「我と思う者は杖を掲げよ」

だが、誰も杖を掲げない。

「かーっ！情けない！フーケを捕らえて名をあげようという者はおらんのか！」

教師たちはみんな、オスマンと目を合わせようとしない。すると、

「あたしが行くわ！」

という声とともにアリーナが手をあげた。

第8話

「あたしが行くわ!」

先程まで暇そうに事態を傍観していたアリーナが手をあげたのを見て、ルイズは驚いた。

「ちょ、ちよつとアリーナ、あなた何言ってるのよ?」

戸惑いながらアリーナに尋ねる。

「あたしがフーケの隠れ家に行くと言ったのよ」

さらりとアリーナは答えた。

「あなたはこの学院の教師でも無いし生徒でも無いでしょ? だから、フーケのことは先生方に任せて…」

「でも誰も名乗り出ないじゃない」

「そ、それはそうだけど…でも、危険よ! 相手はあの《土くれ》のフーケなのよ?」

ルイズが警告するが、アリーナは、

「平気よ! 最近体がなまってたし丁度いいわ。それに、ルイズを危険な目にあわせた奴を放っておくわけにはいかないしね」

と言った。

「その根拠の無い自信はどこからくるのよ…:はあ、わかったわよ。あなたのことだから、どうせ止めても無駄でしょ」

ルイズは諦めた様子で承諾した。

「ありがとう、ルイズ」

「但し、わたしも一緒に行くわよ。使い魔を放って自分だけ安全な場所にいるなんて、主人失か「話は聞かせてもらったわ!」…え?」
突然ドアが開き、二人の少女が入ってきた。

「キュルケ!…とタバサ」

ルイズが二人の名前を言う。

「あたしも捜索隊に参加するわ!」

「何だよ? ツェルプストー、あんたには関係ないでしょ」

「ヴァリエールには負けられないわ。それに、アリーナの力になりたいのよ！」

アリーナに熱っぽい視線を送るキュルケ。

だが、アリーナはそれに全く気付いていないようであった。

「：まあ、いいわ。数は多いに越したことはないし。タバサ、あなたはもうするのかしら？」

ルイズが尋ねた。

「私も参加する。：みんなが心配」

キュルケが感動したような顔をする。

「タバサ……あなたのそういうところ好きよ！」

キュルケはタバサに抱きつこうとしたが、彼女は目にも止まらぬ速さで避けた。

「そういう趣味は無い」

若干冷や汗をかきながらタバサは言った。

「何よー、抱きつくぐらい別に良いじゃないのよー。それに今のあたしはアリーナ一筋だから、そういう心配はしなくていいわよ」

「そういう心配ってどういう心配よ……」

ルイズが突っ込む。

「うおっほん！」

オスマンがわざとらしく咳をした。

「では、君たち四人に頼むとしようかの」

「待ってください！生徒たちを危険な目に遭わすわけには……」

「では君が行くかね？ミスタ・コルベール」

「そ、それは……」

コルベールは言葉を詰まらせる。

「ミス・ツェルプストーは代々優秀な火メイジを輩出してきた家系の出で、自身もトライアングルメイジじゃ。ミス・タバサも風のトライアングルで《シュヴァリエ》の称号を持っておる」

「「《シュヴァリエ》！？」」

ルイズとキュルケが驚きの声を出す。

「そうだったの？タバサ」

「そう」

キュルケの問い掛けをタバサは肯定した。

「《シュヴァリエ》って？」

「ああ、あなたは知らないわよね。《シュヴァリエ》というのは王室から与えられる爵位のこと、爵位の中では最下級のものだけど、普通わたしたちの年齢で貰える人なんてほとんどいないわよ」

アリーナにルイズは説明した。

「えー、で、ミス・ヴァリエールは……その……なんというか……あ、由緒正しき公爵家の出身で……あー、座学は学院トップクラスの優秀な生徒じゃ」

なかなか褒めるところが見つからず、言葉に詰まっていたが、ルイズにじとーっと見つめられて、何とか言葉を捻り出したオスマンであつた。

「彼女の使い魔であるミス・サントハイムは遠い異国の貴族で、魔法は使えないながらも、素手で青銅のゴーレムを倒すことができるほどの格闘のスペシャリストだと聞いておる。この四人ならば秘宝の搜索を任せても大丈夫じゃろう。それとも、誰か彼女らの代わりに搜索をしようと思う者はおるかね？」

教師たちを見回すが、誰も何も言わない。

「はあー、情けないのお。……では、ミス・ツエルプストー、ミス・タバサ、ミス・ヴァリエール、ミス・サントハイム。魔法学院は諸君らの努力と義務に期待する」

オスマンは四人に向き直るとそう言った。

「「杖にかけて」」

ルイズは真顔で胸を張って、キュルケは髪をかきあげながら優雅に、タバサはいつもの無表情で杖を掲げる。

三人が杖を掲げるのを見て、アリーナはどうしていいのかわからなかったのも、とりあえず真似をして手を掲げた。

「……じゃが、万一の場合は迷わずに逃げるんじゃよ？逃げることは

恥では無い。それよりも結果を出せずに命を落とすことのほうが恥なんじゃからな」

オスマンは四人に向かってそう言うと、ロングビルを呼んだ。

「馬車を一台用意してくれ。それで隠れ家まで向かうのじゃ。あと、君には彼女たちの道案内をしてもらおうかの」

「了解しました。オールド・オスマン」

ロングビルは恭しく頭を下げた。

馬車がガタゴトと音をたてながら道を進んでいく。

「ねえねえアリーナ。あたし、あなたのことがもっと知りたいの。あなたの居た国ってどんなところなの？」

キュルケはアリーナの腕に自分の腕を絡ませて胸を押し付けながら聞いた。

「あたしの国はハルケギニアから遠く離れたところにあって……うーん、そうねー、基本的には温暖な気候だけれど、領内には砂漠地帯もあるわね。あんまり観光名所とかはないけど、有名なものでは年に一回砂漠で開かれるバザーがあるかしら」

アリーナは考えながら、自分の父が治める国を説明した。

キュルケのアプローチも特に気にしていない様子である。

「ちよつと！アリーナに近付き過ぎよ！すぐに離れなさい！」

ルイズがキュルケに怒鳴った。

「何よ、別にいいじゃない。ヴァリエールは細かいことにまで口を出してきて五月蠅いわねー。そういえば、夜中のとつもない叫び声もあんたが出したものだっただんですって？おかげで、今日は寝不足なのよ。ああ、眠いわ」

そう言うとキュルケはアリーナにしなだれかかった。

「ちよつ！だから、アリーナから離れなさいって言ってるでしょ！それに、あの時はゴーレムに踏みつぶされそうになったんだから、悲鳴をあげてもしょうがないじゃない！」

「しょうがないって言われてもねえ？ あんな声、普通は殺されそうになったって出せないわよ。とても人間の声とは思えなかったわ」

「何よ！ 頭の中が万年常春女には言われたくないわ！」

ルイズはキュルケを睨んだ。

二人の間に火花が散る。

すると、

「まあまあ、落ち着きな。これから盗賊退治に行くってのに揉める場合じゃねえだろう」

と二人をデルFRINGガーが宥めた。

「五月蠅いわね、あんたは剣なんだから黙ってなさいよ。アリーナ、何でこのボロ剣を持ってきたのよ？」

「だって、連れていけて五月蠅かったんだもん。それに、話相手として道中の暇つぶしぐらいにはなるかと思って」

「がくん。俺、剣なのに武器として全然期待されてない？」

デルFRINGガーが若干ヘコんだ。

「これからもあんたが武器として使われることは無いわよ。だって、わたしたちの中で剣を扱える人間は居ないもの。あんたはただの話相手として購入されたの。武器屋でのやり取り聞いてなかったの？」

ルイズが絶望的な宣告をする。

「そ、そんなはずはねえ。そのアリーナって嬢ちゃんは《使い手》はずだ。《使い手》なら俺を扱えるはず……」

「《使い手》って何よ？」

「……あれ？ 何だっけ？」

全員がずっこけた。

馬車の端で読書をしていたタバサまでもが本を落としそうになっている。

「しょ、しょうがねえだろう。あんまりにも昔の事だったから忘れちゃった」

デルFRINGガーが取り繕うように言った。

「まあ、そんなことどうでもいいわね。とにかく、あんたが武器と

して使われることは無いわよ」「そ、そりゃねえよ……俺の剣としてのアイデンティティーがあ……」

ルイズの宣言に激しく落ち込むデルフリンガーであった。

しばらくすると、馬車は目的地である鬱蒼とした森に到着した。

「ここからは歩いて隠れ家まで向かいましょう」

ロングビルが言った。

五分ほど森の中を歩くと、一行は開けた場所に出た。中心には崩れかけた炭焼き小屋らしきものがある。

「あれが、フーケの隠れ家？」

「私が集めた情報によれば、恐らくそうです」
アリーナの疑問にロングビルが答える。

「世間を騒がす大盗賊があんな廃屋を隠れ家にしてるなんて、ちょっとがっかりだわ」

キュルケが期待外れだというように言った。

「偵察をしてくる」

タバサはしのびあしで素早く小屋に近付いた。

そして、窓から小屋の中を覗くと手招きをしてきた。

タバサにならって、しのびあしで小屋に近寄る四人。

「誰も居ない」

「あら、ホントね」

キュルケが拍子抜けしたように言った。

続けて、タバサは《ディティクトマジック》で小屋の状態を調べる。

「ワナも無い」

「じゃ、入りましょ」

アリーナはそう言うはずかずかと小屋の中へ入って行く。

「わたしは外で見張りをしてるわ」

そう言ってルイズは外に残った。

「私は辺りを偵察してきます」
ロングビルも森の中へと消えていった。

小屋の中は荒れ果てていた。

倒れた柵や壊れた椅子があり、暖炉は崩れ、部屋中にほこりが厚く積もっている。

だが、床には複数の足跡があり、ごく最近に人が出入りしたことを物語っていた。

アリーナ、キュルケ、タバサの三人がフーケに結び付く手掛かりがないか探していると、タバサが部屋の隅に布がかけられた木箱が置かれているのに気付いた。

その木箱を開けてみると、中から大きな美しい杖が出てきた。

「《平和の杖》」

タバサはそれを持ち上げると、掲げてアリーナとキュルケに見せた。

「あっけないわね！」

キュルケが大声で言う。

「つまらないわねー。てつきり、《平和の杖》を巡ってフーケと対決することになるかと思ったのに。……あら？でも、その杖、何処かで見えたことがあるような……」

アリーナがそう言った次の瞬間、ルイズの悲鳴が全員の耳を劈いた。

「わきゃあああああああ！！！！！」

あまりの大声に三人は一斉に両手で耳を塞いだ。

「ル、ルイズ！？」

アリーナは悲鳴のせいでガンガンと痛む頭を押さえながら小屋を飛び出す。

すると、そこには二十メートルはあろうかという巨大な土でできたゴーレムの姿があった。

ゴーレムは足を振り上げると、小屋を踏みつぶす。

しかし、すんでのところでキュルケとタバサは小屋を飛び出し、無事であった。

タバサは素早く呪文を唱えて、杖を振った。

巨大な竜巻が発生し、ゴーレムに衝突する。

竜巻はゴーレムの表面を削りとった。

「《ファイヤーボール》！」

間髪入れずにキュルケが魔法を放つ。

大きな火球がゴーレムの右足を直撃し、右足の下半分を一瞬で蒸発させた。

「やったわ！」

キュルケが歓喜の声をあげるが、

「…ダメ、すぐに再生する」

タバサはそう呟いた。

すると、みるみるうちににゴーレムは傷を再生していく。

竜巻が削りとった部分も、蒸発したはずの右足も元通りになり、はじめの無傷の状態に戻ってしまった。

「何よ、これ!？」

「土ゴーレムは多少の損傷なら、土があるところではいくらでも回復できる」

「それって反則じゃない？」

「今の条件では私達が不利。退却すべき」

そう言って二人退却しようとしたところで、

「あたしに任せて！」

という声とともにアリーナがゴーレムに向かって飛び出した。

「アリーナ!？ 無茶よ!!」

キュルケが叫ぶが、アリーナはゴーレムに向かって走って行く。

ゴーレムは自分にむかってくる人間を踏みつけて潰そうとする。

「そんなの当たらないわよ！」

が、アリーナはそれを軽やかに避けると、地面を強く蹴って高く

跳躍した。

「はあああつ!!!」

アリーナは腕を大きく振りかぶると、拳を思いっきりゴーレムの中心に叩き込んだ。

ドゴオンッ!!!という大きな音とともに、彼女がパンチを叩き込んだ部分を中心にゴーレム全体にひびが入る。

次の瞬間、轟音とともにゴーレムは粉々になって崩れ落ちた。

かつてゴーレムだったものが、小山ほどのただの土の塊に変わり果てている。

「凄い! 凄いわ! アリーナ! まるで物語に出てくる勇者みたい! やっぱりあたしの目に狂いは無かったのね!」

キュルケはしばらくぽかーんとした表情をしていたが、我に返るとアリーナに抱きついた。

「わぷっ!? ちょっとキュルケ、胸が顔に!」

「ますます惚れたわ! 大好きよ!!!」

なおもアリーナを抱きしめつづけるキュルケ。

「アリーナ!」

ルイズが駆け寄ってきた。

「もう! あなたがゴーレムに向かって行くのを見た時は心臓が止まるかと思ったわよ! でも、まさか、あんな大きなゴーレムを一撃で倒しちゃうなんて! アリーナに驚かされるの、これで何回目かしら?」 ルイズが言った。

「大したこと無かったわね。もっと手ごたえがあるかと思ったのに」
アリーナは少し残念そうに言った。

《導かれし者》のひとりであり、元の世界で仲間たちと共に地獄の帝王と戦ったこともある彼女にとっては、大きいだけの土ゴーレムは物足りないようだった。

「フーケは何処?」

タバサが呟いた。

それを聞いて全員がはっとする。

その時、茂みから周囲の偵察に行っていたロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル、フーケを見ませんでしたか？ゴーレムを操るために近くにいますはずなんです…」

ルイズが尋ねるが、ロングビルはわからないというように首を振った。

「きっとアリーナの勇姿に恐れをなして逃げたんだわ。大盗賊といわれていても、所詮はただの盗人なんだから」

「まだそうと決まったわけじゃないわ。あと、あんた何どさくさに紛れてアリーナに抱きついてるのよ。すぐに離れなさい！」

ルイズとキュルケがこんな会話をしていると、ロングビルがゆっくりとした足取りでルイズの背後にまわりこんだ。

そして突然ルイズを羽交締めにした。

「きゃ!?!」

「おっと、動くんじゃないよ」

ロングビルはルイズに自分の杖を突き付けながら言った。

「ミ、ミス・ロングビル、どうして!?!」

「どうして? 察しの悪い子だねえ。さっきのゴーレムを操っていたのはあたしだと言えはわかるかい?」

「え…じゃ、じゃあ、まさか、あなたが…」

「そう、あたしが《土くれ》のフーケ。学院の宝物庫から《平和の杖》を奪い取ったのもあたしだよ」

フーケが冷たい笑みを浮かべながら言った。

「何故、すぐに逃げずにこんなことを?」

タバサが尋ねる。

「使い方がわからなかったんだよ。その《平和の杖》は振ろうが、魔法をかけようが、何も起こらなかった。だから、学院の教師どもなら使い方を知ってるかと思って、わざわざ危険を冒して学院に戻ったんだよ。……まあ、想像以上に腑抜け揃いで、あんたたちみた

いな生徒が来るとは想定外だったけどね」

「ルイズをどうする気？」

「結局、《平和の杖》の使い方もわからずじまいだったからね。こ
うなったら、この子の人質にして身代金でも要求しようかねえ」

そう言うところではルイズを押さえ付けたまま、後退って行く。

「じっとしてな。一步でも動いたら、この子の命は無いよ」

キュルケは悔しそうに唇を噛んだ。

タバサもフーケを睨んだ。

「待って」

アリーナがフーケを呼び止める。

「何だい？」

怪訝な顔をするフーケ。

「あたしは《平和の杖》の使い方を知ってるわ。教えたら、ルイズ
を解放してくれるかしら？」

「何だって？ 本当かい？」

「ええ、本当よ」

フーケは考える。

（…この娘の言ってることが本当かどうかは別として、話を聞いて
おいて損は無いね。まあ、例え本当だったとしても人質を解放する
つもりはないけど）

「わかったよ、使い方を教えてくれたら、この子を解放してやるよ」
フーケは言った。

アリーナはタバサから《平和の杖》を受け取る。

「この杖はね、こうやって使うのよ！」

アリーナはフーケに向けて杖を振った。

…が、何も起らなかった。

「何だい、何も起こらないじゃな…」

フーケが言葉の途中で固まる。

それをアリーナとフーケ本人を除く三人が怪訝に見ていると、

「……ふふふ、あっはっははははは……！！！！」

フーケがいきなり大笑いしだした。

「へ？何？？」

ルイズがわけがわからないというように呟いた。

キュルケとタバサも困惑している。

「この《平和の杖》：いえ、《ほほえみの杖》は振った相手を笑わせる効果があるのよ。フーケがこの杖の使い方がわからなかったのは当たり前よ。だって、笑わせる相手が居なければ、いくら振ったって何も起こらないもの」

アリーナが説明した。

「あははははははは！！！！！！」

フーケはお腹を抱えながらうずくまって爆笑している。

「今のうちに縄で縛っちゃいましょ」

アリーナはそう言うのと笑い過ぎて呼吸困難になっているフーケを、馬車から持ってきた縄で縛り上げたのだった。

第9話

「ふむう……まさか、あのミス・ロングビルがのう……」

捕縛したフーケを連れて学院に戻ったアリーナ、ルイズ、キュルケ、タバサの四人は学院長室でオスマンと教師たちに森で起こった出来事を報告していた。

「ミス・ロングビルをどのような経緯で秘書に採用されたのですか？」

オスマンの脇にいたコルベールが尋ねた。

「わしが街の酒場に行った時のことじゃ。彼女はそこで給仕をしておったんじゃが、ついついこの手がお尻を撫でてしまったのう」

「それで？」

コルベールが促す。

「じゃが、それでも怒らない上に『学院長はおヒゲがダンディで痺れます』とか言ってるわしのことをべた褒めしながら、愛想良く何度も酒を勧めてくるもんじゃから……つい、秘書にならんかと言ってしまったんじゃ」

オスマンは照れたように言った。

「死んだほうがいいのでは？」

「こんな変態エロじじいが学院長でいいの？」

「最低」

オスマンに氷のように冷たい視線がいくつも注がれる。

「カーーーッ！！何じゃ何じゃ！あんな美人が媚びを売ってきおったら男なら誰でも騙されるわ！」

オスマンは目をむいて怒鳴った。

とても老人とは思えない迫力だった。

だが、

「大声で誤魔化そうとしてもダメですよ」

ルイズはオスマンを白い目で見つめながらそう言い放った。

「オールド・オスマンにはフーケを秘書に雇った責任として、破壊された宝物庫の修理代を出して頂きましょう」

「当然ですな」

「当たり前です」

コルベールの言葉に教師たちが同意する。

「何じやい何じやい：ヨボヨボの年寄りをいぢめて何が楽しいんじや…」

オスマンは机に突っ伏しながら大人気無くえぐえぐと涙を流していたが、教師たちは話は終わったとばかりにそれを無視して部屋を出て行った。

「……オールド・オスマン、いい加減泣き止んでください。話が進みません」

相変わらず泣き続けるオスマンにコルベールが言った。

「お、おお、そうじやの。さて、君たちはよくぞフーケを捕らえ、

我が学院の秘宝、《平和の杖》を取り返してきた」

オスマンはアリーナたち四人に向かって言った。

「フーケは城の衛士に引き渡したし、杖も無事に元通り宝物庫に収まった。一件落着じゃ」

オスマンは四人の頭を撫でようとしたが、

「セクハラですか？」

とルイズに拒絶された。

「そ、そんなつもりじゃないんじや……」

オスマンが再び涙目になる。

「あー、もういいですから、とっとと話を進めてくださいな」

面倒くさそうにキュルケが促す。

「う、うむ。君たちの《シュヴァリエ》の爵位申請を宮廷に出しておいた。といってもミス・タバサは既に《シュヴァリエ》の爵位を持っておるから、精霊勲章の授与を申請しておいた」

「本当ですか？」

キュルケの顔がぱあっと輝く。

タバサも心なしか嬉しそうである。

「本当じゃ。いいのじゃ、君たちはそれぐらいのことをしたのじゃから」

と、ここで、アリーナはルイズが暗い顔をしているのに気付いた。
「ルイズ、どうかしたの？」

アリーナが尋ねると、ルイズは意を決したようにオスマンに向き直った。

「オールド・オスマン、わたしは《シュヴァリエ》の受章を辞退させて頂きます」

「何じゃと？」

「何を言ってるのよ、ルイズ？」

ルイズの辞退に全員が驚いた。

「わたしは今回、何もしていません。なので、爵位を受章する権利はわたしにはありません」

ルイズははっきりとそう言った。

「じゃあ、あたしも辞退するわ」

アリーナもルイズの言葉を聞いて辞退を申し出た。

「アリーナ！？何を言ってるのよ！あなたが辞退する必要なんてないわ！」

「ご主人さまが辞退するのに使い魔のあたしが受け取るわけにはいかないでしょ？」

「何言ってるのよ！今回の事で一番活躍したのはアリーナなのよ！それに：それに！使い魔が戦っているのに、ただ見てるだけで何もできなかったわたしはあなたにご主人さまなんて呼ばれる資格は無いわよ！！」

ルイズが叫んだ。

「そんなことないわ。ルイズ、あなたはあたしやキュルケ、タバサと違って有効な攻撃手段を持ってないわよね。それなのに、使い魔のあたしのことを心配して、一緒にフーケの隠れ家なんて危険な場所まで来てくれた。そんな使い魔思いのルイズが主人失格のわけな

いわ」

「アリーナ…」

ルイズは感激した。

こんな自分を主人として認めてくれたアリーナに。

「でも…やっぱり、爵位を受け取るわけにはいかないわ。わたし、何もしてないし…」

「それなら、やっぱりあたしも辞退するわ」

「そんなことを言わないで。わたしのことなんか気にせずにアリーナは受章を…」

なおもルイズが《シュヴァリエ》の受章を断っていると、

「アリーナが辞退するのなら、あたしも辞退するわ」

とキュルケが言い出した。

「キュルケ！？あんたまで何言い出すのよ！」

「だって、アリーナが居なかったら、あたしたちは《平和の杖》を取り戻すこともフーケを捕まえることもできなかったわ。《シュヴァリエ》の爵位を授与されるのに最も相応しいのはアリーナよ。そのアリーナが受章を断るのなら、あたしも辞退するわ」

キュルケはきっぱりと言った。

「私も」

タバサがちょこんと手を挙げた。

「タバサまで!？」

ルイズが驚きの声をあげた。

「タバサ、あたしに付き合う必要は無いのよ」

そうキュルケは言ったが、

「いい。みんなが辞退するなら私も受け取らない」

とタバサは言った。

「ふむ…でも困ったのう。辞退するとなると宮廷に出した爵位申請を取り下げに行かねばならんのじゃが、一回申請したものを取り下げるのはなかなか大変なんじゃよ。ましてや、四人全員の申請を取り下げるとなると手続きに骨が折れるわい。面倒じゃから、できれ

ばやりたくないんじゃない？」

オスマンがちらりとルイズを見ながら言った。

「ルイズ、あなたが爵位を受け取れば全て丸くおさまるのよ」

「何でこうなるのよ……」

アリーナの言葉にルイズは肩を落とした。

「はあ……わかりました。《シュヴァリエ》の爵位を受章させていただきます」

オスマンに向き直ると諦めたように言った。

「うむ、そうか、受章してくれるか。いやはや、面倒なことにならないで良かったわい。では、四人には追って沙汰があるじやろう」

オスマンは安心したように言った。

「さてと、今日の夜は《フリッグの舞踏会》じゃ。君たちのおかげで、このとおり《平和の杖》も

戻ってきたし、予定通り執り行う」

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりました！」

キュルケの顔がぱっと輝く。

「今晚の舞踏会の主役は君たちじゃ、用意をしてきたまえ。精々着飾るのじゃぞ」

うきうきとしたキュルケを先頭にルイズたちは部屋を出て行く。

「ルイズ、ちょっと待って」

タバサに続いて部屋を出ようとしたルイズにアリーナが声を掛けた。

「少しオールド・オスマンに話があるのだけど、あなたにも居てほしいのよ」

「?…別にいいけれど……」

「あら、アリーナ、ルイズ、どうしたの？」

キュルケが尋ねた。

「あたしたちはちょっとオールド・オスマンに話があるから二人は先に行っていていいわ」

「あら、そう?じゃあ、お先に失礼するわね」

キュルケとタバサが完全に部屋を出て行ったのを見計らうとアリーナはオスマンに向き直った。

「あなたに聞きたいことがあるわ」

「何じゃね？」

「あの《平和の杖》はあたしのいた世界のものよ。あたしの世界では《ほほえみの杖》と呼ばれているわ」

「何だって！？それは本当なのかい？」

コルベールが驚きの声をあげる。

「本当よ、実物を見たことがあるもの。オールド・オスマン、あれは何処で手に入れたのかしら？」

アリーナが尋ねた。

「ふむ…実はあの杖は遥か昔からこの学院にあるんじゃないよ。わしがこの学院長になる前からじゃ。確かわしの先代…いや先々代の学院長じゃったかのう…とにかく、何代か前の学院長があの杖を学院に持ち込んだんじゃないよ。じゃが、杖をいったい何処から持ってきたのかは記録にも残っておらんし、わからんのじゃよ。…元の世界に帰る手掛かりになったかもしれないのに、力になれんですまんのう」

オスマンは申し訳なさそうに言った。

「いいえ、気にしないで。それに、もし今サントハイムへ帰る方法が見つかったとしても、今すぐに帰るつもりはないもの」

好奇心旺盛なアリーナは、せっかく異世界なんて普通では来れないところに来れたのだから、もっとこの世界を見て回りたいと考えていたので、サントハイムのことが少し気に掛かってはいたが、まだ元の世界に帰るつもりはほとんど無かった。

「でも、あの杖が何で秘宝なんて呼ばれてるのかしら？あれ、あたしの世界じゃ大した価値ないわよ」

「実は《平和の杖》、…いや《ほほえみの杖》が学院に収められた当時、老朽化した学院の建て替えの話が持ち上がったんじゃないが、その頃の王政府は以上に財政難での、魔法学院の建て替え費用を

出す余裕が無かったそうなんじゃ。じゃから、学院の教師たちが費用を出し合うことになったんじゃが、当時の学院長の家は超がつくぐらい貧乏での。しかし、学院長という立場上費用を支払わないわけにはいかん。それで費用の代わりに、とてつもない魔力を秘めた伝説の杖だとか言って差し出したのがあの杖だそうじゃ。じゃが、すぐにそのウソがバレて、その後学院長は辞任に追いこまれたんじやよ。しかし、トリステイン魔法学院の学院長ともあろうものがそんなことをしたというのが周知されれば、学院の権威に傷がつく恐れがあったんでの。学院長は『健康上の理由で』辞任したということになり、《ほほえみの杖》も『秘宝』として、そのまま学院の宝物庫に収められ、現在に至るんじや」

オスマンは水差しからコップに水を注いで飲み干す。

「なるほど、そんな事情があったのね」

アリーナは納得した様子であった。

「オールド・オスマンの先々代の学院長の頃って、いったい何百年前の話よ…」

ルイズがぼそりと呟いた。

「しかし、私もそんな話初めて聞きましたが」

コルベールが言った。

「そりゃ知らんで当然じゃよ。あの騒動の記録は既に全て破棄されておるからのう。わしも今回のフーケの騒ぎが起こるまで、すっかり忘れておったわい。まあ、《ほほえみの杖》だけじゃなくて、実はこの宝物庫にある物のほとんどはガラクタで、宝物庫というよりも実際は物置みたいなもんなんじやがの。ところで、ミス・サントハイム、話というのはこれだけかの？」

「ええ、そうよ。杖の秘密を話してくれてありがとう」

「いやいや、礼には及ばんよ。結局あの杖が何処からもたらされたのかもわからなかったんじやしの。では、二人も舞踏会の準備をできなさい。もう時間もあまりないぞい」

オスマンとコルベールはアリーナとルイズの二人を見送った。

「……はあゝ、《ガンダールヴ》のことを聞かれるのかと思ってドキドキしたわい。あのことは今のところはなるべく誰にも秘密にしておきたいからのう」

オスマンはだらんと椅子の背にもたれ掛かる。

「私もそうかと思ってましたが……しかし、あの杖が異世界の杖だったとは。世界が異なれば魔法の仕組みも異なるでしょうから、どのような魔法がかけられているのか是非調べてみたいですね！」

自分の研究者としての部分を刺激され、興奮するコルベール。

「あー、例の杖はもう宝物庫に嚴重にしまってしまったから、調べるのは当分は無理じゃろ。一応『秘宝』ということになったる杖じやし」

それを聞いてコルベールはとても残念そうに頂垂れた。

「……あ、ところで、《ガンダールヴ》のことを聞いてこなかったということは、能力に気付いてないんでしょうか？」

「たぶんそうじゃろうな。彼女、生身でもあれだけ強いんじやから、これからも武器を使うことなんてあまりないじゃろ。一撃でフーケのゴーレムを倒すとか信じられんことをしておるし。もしかしたら一生ルーン的能力に気付かんかもしれんの。まあ、それならそれで良いのかもしれんが。《ガンダールヴ》であることが明るみに出たら、面倒なことに巻き込まれてしまうかもしれんしのう」

「まあ、それもそうですね。ただ、そうなると伝説の使い魔の能力がもつたいたないような気がします……。それにしても何故、あのミス・ヴァリエールの使い魔であるミス・サントハイムに《ガンダールヴ》のルーンが現れたのでしょうか？」

「確かにそうじゃのう。現在残っている記録によると歴史上、《ガンダールヴ》を使役したのは唯一、始祖ブリミルだけということになっておる。始祖ブリミルは現在では失われた系統、虚無の使い手

じやったともいわれておるが…」

ここでコルベールが何かに気付いたようにはっとする。

「あの…オールド・オスマン…ミス・ヴァリエールの魔法の系統が何なのか未だにわかってませんよね…通常、彼女くらいの年齢ならどの系統かはつきりとわかっているはずなのに…その、もしかして、《ガンダールヴ》を召喚したのは彼女が始祖と同じ系統だから…ということはありませんよね？」

コルベールとオスマンは顔を見合わせた。

「…た、確かにヴァリエール家は王家の庶子が開祖じゃから、始祖ブリミルの血をひいておるし、可能性として無くは無いかもしれないが…いや、でも、発想が飛躍し過ぎではないかのう。使い魔が《ガンダールヴ》だからといって、主人が…その…虚無の使い手というのは。それに、よりにもよって魔法が苦手なミス・ヴァリエールがそうだというのは」

「そ、それもそうですな！まさかそんなことがあるわけ無いですな！」

引きつった笑みを浮かべながら、オスマンに慌てたように言葉を返すコルベールであった。

第10話

「ふう、踊った踊った！こんなに踊ったの久しぶりよ」

そう言いながらワイングラスを傾けるアリーナ。

火照った体に冷たいワインが気持ち良い。

「そりゃそうよ。だってあなた誘いをひとつも断らないんだもの」
隣にいるキュルケが言った。

ここは《アルヴィーズの食堂》の上階にあるホール。

現在舞踏会が開かれているこのホールでは、綺麗に着飾ったたくさん
さんの生徒たちが思い思いの相手と踊っていた。

「だって、ダンスを踊るの久しぶりだったから楽しくて。でも、女
の子からもダンスの申し込みを受けるとは思わなかったわ」

アリーナは何人もの男子生徒からダンスを申し込まれたが、それ
以上に、キュルケを含むたくさんの方から女子生徒からも申し込みを受け
たのだった。

「それはあの決闘騒ぎの時から、あなた女子生徒に人気があるんだ
から当然よ。でもアリーナは誰にも渡さないけど！」

最後のほうにキュルケは周りに聞こえるくらい大きな声で言葉を
付け足した。

「あらタバサ、何を食べてるの？」

アリーナは近くのテーブルで黙々と食事をしているタバサに声を
かけた。

手に持った皿には、なにやら緑色の草のようなものが大量に盛ら
れている。

「あー、ハシバミ草ね。この子、これが大好きなのよ」
タバサのかわりにキュルケが答えた。

「へえー、そうなの。じゃあ、あたしも食べてみようかしら」

そう言うと、アリーナはハシバミ草を皿に取り、フォークで口に
運んだ。

「あ、アリーナ！ちょっと待つ…」

キュルケが止めようとした時には、アリーナは既にハシバミ草を咀嚼しているところだった。

「…おいしい？」

タバサが尋ねる。

すると、

「うん、美味しいわ！苦味が強いけれど、この苦味がクセになるわね！」

アリーナはとても美味しそうに笑顔でそう答えた。

「良かった」

タバサは若干うれしそうに言った。

ハシバミ草仲間が見つかったのがうれしかったようだ。

「へ？…あ、アリーナ？」

これに驚いたのはキュルケである。

ハシバミ草はとんでもなく苦くて激マズなので、好んで食べるような人はよほどの物好き以外ほとんどいない。

たまに学院でも、栄養満点だからという理由で食事に出されることがあるが、生徒の99%が全く手をつけない。

キュルケ自身も大嫌いで、もう二度と食べたくないと思っていたし、これまでハシバミ草を好んで食べる人間は、自分の親友ひとり以外見たことが無かった。

しかし、アリーナはそのハシバミ草をあんなに美味しそうに食べたのである。

これが驚かすにはいられることとは思えなかった。

「キュルケ？どうかした？」

アリーナが驚きに固まっているキュルケの様子を疑問に思って尋ねた。

「あ、アリーナ、本当に美味しいの？」

「ええ、美味しいわよ。あなたも食べてみたらどうかしら」
キュルケにハシバミ草を勧めるアリーナ。

(う……本当は食べたくないけれど、折角いとしのアリーナが勧めてくれるのだから、食べてみようかしら……。もしかしたら、このハシバミ草は他のと違って苦味が控え目なのかもしれないし……。だから、アリーナは美味しいと言ったのかも……)

キュルケは勇気を出して、ハシバミ草を食べてみることにした。

「って、もう無いじゃないのよ」

テーブルの上にまだ残っていたはずのハシバミ草がいつの間にか忽然と消えていた。

どうやら、キュルケがいろいろと考えている間に、タバサが全部食べてしまったようだった。

「あー、無いんじゃないかないよね。折角だから食べてみようかと思ったのに残念だわー。でも無いんじゃないわよね、無いんじゃない」

ホッとした様子でキュルケは言った。

「あら、じゃあ、あたしの食べかけだけどあげるわ」

「え!?! いや、でも……」

食わずにすみそうだったのに『残念だ』なんて言っただけに窮地に陥るキュルケ。

「ほら、あーん」

「!!!!!!」

アリーナは自分の皿に残っていたハシバミ草をフォークで突き刺すと、キュルケの口元に持って行った。

(アリーナが……アリーナが……あたしに『あーん』ってしてくれるなんてっ!! しかもこれ、間接キスじゃないっ!? 今日は何て最高な日なのかしら!! ああ……ゴーレムを倒した昼間のあなたも格好良かったけど、今のあなたの『あーん』っていう顔もかわいくて素敵よ……)

キュルケは瞳をキラキラと輝かせてアリーナを見つめていた。

そして、天使のような笑みを浮かべて、誰が見てもそうとわかるくらいうれしそうにしながら、アリーナにハシバミ草を食べさせて

もらう。

「どう？美味しい？」

アリーナが尋ねる。

すると、少しの沈黙の後に返答があった。

「……え、ええ美味しうゝえっ、ごめんやっぱ無理」

「うわっ！？キュルケ大丈夫！？顔が土気色よ！…って、ここで吐かないでー！」

「うゝっ……だ、大丈夫大丈夫…も、もう飲み込んだから…」

キュルケはハシバミ草を吐き出しかけたが、なんとか飲み込んだ。「ごめんなさい、あたしが勧めたりしたから」

「謝らないで、アリーナ！あなたには何の責任も無いんだから。あなたが美味しそうに食べるのを見て、あたしもハシバミ草嫌いを克服できるかなと思って試しに食べてみただけよ。…結果は散々だったけれど」

まだ口に苦味が残っているようで、顔をしかめながらキュルケは言った。

依然として顔色が悪く、気分も悪そうである。

アリーナと間接キスをするために支払った代償は大きかったようだ。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなゝり〜！」

そんなやり取りをしていると衛兵が大声でルイズの登場を告げた。

「わあ、かわいいっ」

アリーナが声をあげる。

ルイズは純白のドレスに身を包み、バレッタで髪をまとめていた。そして、手には肘までの白い手袋がはめられており、まるで人形のように可愛らしく、清楚であった。

ルイズはホールを見回してアリーナたちを見つけると、一直線に歩いて行った。

声をかけてくる男子たちなど完全に無視である。

「かわいいわ！ ルイズ、今のあなたすっごいかわいいわ！」

「あ、ありがとう、アリーナ。あなたも、き、綺麗よ」

ルイズは照れたように頬を朱に染めながら言った。

公爵の娘である彼女は社交の場での世辞には慣れていたが、『ゼロのルイズ』と馬鹿にされ、攻撃的な性格も相俟って親しい友人がほとんどいなかったため、同年代の同性から純粋な気持ちで褒められるのは久しぶりであった。

「そうよねー、アリーナの美しさにはヴァリエールなんて足元にも及ばないわよねー」

キュルケの言葉に一瞬ムツとするルイズだったが、すぐに落ち着いていた様子で、

「はあ、本当にあなたはいつも……まあいいわ、今のアリーナがとても素敵なのは事実だもの」

と言った。

アリーナはルイズと対照的に漆黒のパーティードレスに身を包んでいた。

ドレスには黄金色の美麗な刺繍が施されており、漆黒の生地によく映えている。

「：ただそのドレスがツエルプストーが買ったものだというのが気に入らないけれど」

ルイズの言ったとおり、今アリーナが着ているドレスはこの間のトリスタニアでの買い物時にキュルケが選んだ服のうちの一着だった。

なので、もちろん露出度が高い。

裾には深くスリットが入っているし、胸のところも大きく開いていて、深い谷間がまる見えである。

「あら、別にあなたが気に入るか気に入らないかなんて聞いてないわよ。それに、前にも言ったけれど、ヴァリエールが選んだドレスなんてアリーナに似合うわけないんだから」

「な、何ですって？ そそそそれはわたしに服のセンスが、な、無い

って言いたいのかしら？」

またいつものルイズとキュルケの口喧嘩が始まろうとした時、

「ケンカするほど仲が良い」

タバサがぼそつと言った。

「「違うわよ！！！！」」

同時に凄い勢いで否定する二人。

「わたしとキュルケの仲が良いですって！？ツェルプストーは先祖代々の仇敵なのよ！冗談はやめて！」

「それはこっちの台詞だわ！」

顔を赤くしてルイズとキュルケは言い合う。

「あら、でも、わたしにも結構仲が良いように見えるけれど」

「アリーナ！？あなたまで何を言ってるのよ！そんなわけないでしょ！」

「そうよ！あたしがルイズみたいになちんちくりんと仲良しなわけないわよ！」

二人に肩を掴まれ、前後左右にぶわんぶわん振り回されて目が回りそうになるアリーナ。

「わ、わかったから！わかったから、と、とにかく落ち着いて二人とも！ほら、周りの人も見てるから！」

その言葉にはっとした二人が周りを見回してみると、自分たちが大勢の注目を集めていることに気付いた。

「…あ、あー、ちよつと熱くなり過ぎちゃったみたいね」

「そ、それもそうね。わ、わたしも公爵家の娘なのに大人気なかったわ」

二人は少し恥ずかしそうに言った。

「そんなに必死に否定しなくても…」

二人から解放されたアリーナが呟いた。

「ああ、もう、何でわたしこんなバカみたいなことしてるのかしら。アリーナとダンスを踊ろうと思ってたのに」

そう言うルイズは仕切り直すように軽く咳払いをした。

そして、ドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を曲げて優雅にアリーナに一礼をした。

「わたくしと一曲踊って頂けませんか、姫殿下」

「よろこんで」

アリーナは微笑みながら、ルイズの手を取った。

「姫殿下？」

キュルケが不思議そうに言う。

「あ、いや、その、今のアリーナはお姫様みたいに綺麗ってことよ。うん、そう」

ルイズは慌てたように言うと、アリーナとそそくさとホールに向かったのだった。

「はぁ、危なかったわ。うっかり姫殿下なんて口走っちゃうなんて」

ルイズはステップを踏みながら言った。

「でも、キュルケとタバサになら、あたしが王女だっていることを話しても問題無いと思うけれど」

「うーん、それはそうかもしれないけれど…でも…」

ルイズはアリーナの秘密を話すことに消極的なようで、齒切れが悪い。

実はルイズは、学院の生徒の中で自分だけがアリーナの秘密を知っているということに、ある種の特権的な意識を持っているので、あまり他の人間にアリーナの正体を知らせたくないのだった。

「まあ、ルイズがイヤなら二人にはまだ話さないわ」

結局キュルケとタバサには、今まで通り、アリーナは異国の貴族ということにしておくのだった。

それからしばらく、ルイズとアリーナは曲に合わせて踊っていた

が、やがてルイズが口を開いた。

「あの…今日はありがとう」

「へ？」

「わたしがフーケに人質にされた時、助けてくれたじゃない。あのままだったら、わたし、フーケに身代金目的で連れ去られて、きっと、恐ろしい目に遭わされていたと思うわ。それに、お父様やお母様、他にもいろいろな人たちに迷惑をかけることになっていたわ。…だから、本当にありがとう」

ルイズは目を逸らして、照れながら、感謝の言葉を述べた。

「あたしは当然のことをしただけよ。だって、あたしはルイズの使い魔でしょ。それに、ルイズはご主人さまであると同時に、大切な友達なんだから」

「アリーナ…」

ルイズはうれしそうに呟いた。

舞踏会も終わり、皆が寝静まった真夜中。

ルイズはひとり眠ることができないでいた。

（やっぱり舞踏会の前に、疲れたからって、うっかり寝ちゃったのがマズかったわね。しかも、そのせいで舞踏会に行くの少し遅れちゃったし）

寝返りをうつと、熟睡しているアリーナの姿が目に入った。

（…もしアリーナが居なかったら、フーケを捕まえるどころか、逆に返り討ちにあっていたかもしれないのよね。使い魔だけを戦わせるのは主人失格とか言って、フーケの討伐について行っただけけど、結局何も出来なかった上に人質になって、足手纏いになっちゃうなんて…こんなことじゃ、本当に主人失格だわ。…やっぱり、わたしなんかじゃアリーナには釣り合わないのよ……。…せめて、アリーナの足を引っ張らないようにはならないと……。…）

そんなことを考えながら、ルイズは眠りに落ちていくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0807i/>

おてんば姫の冒険～ハルケギニア編～

2010年10月21日13時46分発行